とあるフレンダ・セイヴェルンのヒーローアカデミア

RK6246

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

フレンダがヒロアカの世界に転生した話です。

目次

軍師輪（フレンダ・セイヴェルン）…オリジン#1 ―――― 1
#2 日常 ―――― 5
#3 ワンフォーオール ―――― 10
#4雄英入試 ―――― 14
#5 入試デスヨ ―――― 21
#5・5 祖母孫喧嘩 ―――― 37
#6 個性把握テスト ―――― 43
#7 戦闘訓練？何それ美味しいの？ 68
#8 八つ当たりと書いてリベンジと読む ―――― 87
#9 お笑い芸人にとって一番きついのは終始観客が誰1人笑わないことだよね。 ―――― 99
#10 私はこの空気を知っている 105
#11 自分が恥ずかしいと思う癖は早めに直しておくほうが身のためだと思う。 ―――― 114
#12 良く考えてみれば『能力』より☒個性☒の方が種類が豊富な気がする 119
#13 ☒個性☒で多重能力ってありなのね。 ―――― 129

軍師輪（フレンダ・セイヴェルン）・オリジン＃1

　私はフレンダ・セイヴェルン元々学園都市で暗部組織『アイテム』のメンバーの一人で爆弾を使った戦闘をメインに行なっていた。でも私は『アイテム』のリーダーであり、Ｌｅｖｅｌ５第４位原子崩し（メルトダウナー）麦野沈利を裏切ってその落とし前として体を真っ二つにされて殺された。言い訳をするとするならアジトに向かう途中心理定規（メジャーハート）に遭遇してしまったからと答える。あいつは敵でも私との心理的距離を操って『アイテム』のアジトを教えてしまった。私は麦野が私を殺したことは恨んでないと言えば嘘となる。でも麦野は裏切られる事が嫌いなのは知っていた。幾ら心理定規に操られたとはいえ裏切ったことは事実だ。だからしょうがないと思ってる自分もいる。心残りがあるとすれば、妹のフレメア・セイヴェルンの安否。それと佐天涙子との約束、鯖缶を使った料理をご馳走になる筈だったが、約束の日の前に私は死んでしまった。あの子に行けなくなってごめんって言いたい。でももう何もできない。私は死んでしまったから。でも、!!なんで、
（こうなんのよーーーーーーーー!!!!）
　私は生まれたての赤ん坊になっていた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

もう一度頭の中を整理しよう。まず私の名前はフレンダ・セイヴェルン・・・以下略

何これ・・・若返り？それとも夢？・・・夢にしては奇妙な夢だけど。とりあえずほっぺつねってみるか。、、痛い。・・・っえ、これ夢じゃないの？じゃあこれ何？学園都市も死者蘇生技術と若返りの技術でも完成できたの？それともどっきり？精神系能力者の力で幻覚でも見せられてるの？・・・わからん。そもそもここはどこ？天井は白いしなんかケースに入れられてるし、周りに赤ん坊がたくさんいるし、ガラスの窓もある。・・・やっぱりこれ実験？天井が白いのはともかくケースに入れられてるのは逃げ出さないように。周りの赤ん坊は置き去り（チャイルドエラー）を被験者に、ガラスの窓は監視のため？。・・・だったら死者蘇生の技術は？私完璧に上と下でパッカーンなったし、確実に死んだはず。う～ん、わからん。［グゥ～～～～～］結局、考えてたらお腹空いてきた訳よ。鯖缶欲しい。涙子の鯖缶使った料理食べたい。でもこの状況じゃあ無理か。、、そう言えば前に絹旗が見てた映画で転生ってやつがあったわね。確か、、死んだ主人公が別の世界で記憶を持ったまま生まれ変わって、、て話だったっけ？・・・エ！じゃあ私転生したの？それだったらここの部屋も構造も周りの赤ん坊も説明がつく。、、結局、死者蘇生の技術も若返りの技術も無かったって訳よ。・・まぁ結局、学園都市の闇から離れたことになるからよかったってわけよ。じゃあ赤ん坊ってことは私

にもちゃんとお父さんやお母さんもいるってわけね。、、空腹の次は眠気か。まぁ赤ん坊だし今寝てもいいわよね。

ーーーー数時間後ーーーー

「龍史くん見てみて、この子ぐっすり眠ってるわよ！」
「ほんとだな。それに寝顔は僕そっくり。」
「確かに。でもこの子将来何になるのかしらねぇ～。」
「双葉ちゃんの様に弁護士じゃないか？」
「それかあなたと同じ様にヒーローかもしれないし。」
「わからないね～」
「まぁこの子が龍史くんの『個性』を受け継いだらヒーローになるって言うかもよ。」
「逆に双葉ちゃんの『個性』でも使い方を変えればヒーローになれるし。」
「もしかしたら私たちの『個性』が複合した『個性』かもしれないしね～。」
「それだったら僕は職場に自慢するよ。」
「「楽しみだねぇ～～～」」
「そういえば龍史くんこの子の名前決まった？」
「一応決めたことは決めたけど。」
「何て名前？」

「輪（りん）。軍師輪（ぐんし　りん）。」
「輪かぁ。いい名前ね。」
「そうだろう、そうだろう。」
　そして軍師龍史と軍師双葉の間に生まれたフレンダは軍師輪と名づけられたのである。

#2　日常

私の名前は軍師輪になった。どうしてこんなに複雑な漢字を使ってんのか知りたいけどまだ喋れないから突っ込む事ができない。でも今一番驚いてることはこの世界の人の8割はなんらかの異能を持っててそれを『個性』と呼んでいる。そしてその個性は自分たちの両親どちらかが持っている個性を受け継いだり、複合した個性を発症したりしているらしい。ちなみに私の両親の個性は、母さんが『自分が持っているものを無限に取り出せる個性』で、父さんは『あらゆる武器を生み出せる個性』だ。どっちも使い方を変えれば強い個性私個人では父さんの個性が欲しいけど。なんでって?そりゃー爆弾をたくさん出せるからって訳よ。母さんの個性だったとしても鯖缶から無限にサバを出せるから別にいい。結局、どっちの個性を手に入れとも別にいいって訳よ。

ーーーーー数年後ーーーーー

私は幼稚園に通っていた。幼稚園では3歳〜6歳までの子供が通っていて一般的には4歳〜に個性を発動させてるらしい。そして私は4歳になってから1週間後に個性を発動していた。結果的に私の個性は『爆弾やそれに関係している物を無限に生み出せ

る』と言う個性だった。そう、父さんと母さんの個性が混ざってできた個性だった。それを知った時、両親は私のことを神童だの天才だの才能にあふれているなどなどｅｔｃそこらへんのことを言っていた。私は褒められたことに素直に喜んだが、あまり調子に乗らない様にした。何故って?それはまた何かやらさない様にね。そなふうな日常を送ってた。そして

「輪ちゃん遊ぼー」

「いいよ。でも輪じゃなくてフレンダって呼んで。」

「なんで?」

「結局そう呼ばれたいからって訳よ。」

「わかった。じゃあ一緒に遊ぼーふれんだ」

　緑谷はそう言って私の手を引いて爆豪の元に連れてかれた。

「おせ～ぞ出久。でもちゃんと輪を連れてきたな。」

　どうやら爆豪が緑谷に頼んで連れて来させられたみたいだ。結局素直じゃないって訳よ。

「爆豪～輪じゃなくてフレンダって呼んでよ。」

「わかったフレンダ。」

　幼稚園生は素直だな～。

「っで結局どこに行くって訳よ？」
「森の中に探検しに行くぞ」
　そう言って私たちは森のなかへ進んで行った。
「でもかっちゃんの個性すごいな～。僕も早く個性使える様にならないかな～」
「デクがどんな個性でも俺は負けね～。」
「そう言えばふれんだも個性が使える様になったんだよね？」
「そうよ。」
「どんな個性なんだフレンダ。」
「爆豪の個性と少し似ているわよ。」
「どんな感じに？」
「爆豪の個性は掌で爆発を起こすでしょ。私は爆弾を作り出せる個性なの。」
「すごいねふれんだ。」
「そう言えば緑谷、結局あんたはお母さんかお父さん、どっちの個性が使いたい訳よ。」
「う～～ん。わかんない。」
「そっか～」
　このとき私は緑谷がどんな個性を使う様になるのか少し楽しみだった。

ーーーーー数日後ーーーーー

「デクって『個性』がないんだってー。」
「えー」
「それってムコセーって言うんだって～」
「ダッセー」
　それを聞いたとき私は緑谷が無個性だっと言う事実より
（えっ、今時の幼稚園生ってこんなん感じなの!?子供怖っ！）
　そんなことを考えていた。そして、私は緑谷をみたら、あいつは絶望している人間の目をしていた。でも私は無個性とか関係なく、友達は大事にしたいから馬鹿にせず、
「緑谷！一緒に遊ぼー！」
　そう声をかけたらあいつ目に少し光が見えた。
「うん。遊ぼー」
　そんな感じに緑やとよく遊んでた。いや、正確に言うと私と緑谷の二人だけじゃなくて、爆豪とそのお友達と一緒に遊んでた。遊んでる中爆豪や他の子たちは個性を使ったりしているところを緑谷は羨ましそうな目で見ている他。
「緑谷」
「どーしたのふれんだ？」
「いいこと教えてあげる。」

「なになに？（わくわく）」
「結局、個性がなくても命を投げ捨てる覚悟と人を助けたいって想いがあるなら立派なヒーローって訳よ。」
私は緑谷にそんな言葉しかかけられなかった。
でも緑谷はあまりその言葉の意味を理解してなかった。
「どーゆー意味？」
「わかる様になるまで覚えときなさいよ。」
これは前世の私が無能力者［レベル０］に行った言葉だ。正確に言えば〔無能力者でも命を投げ打つ覚悟があるなら立派な戦力手って訳よ。〕だがここでは言い方を変えた方がいいと思い緑谷には少し変えて言った。
２年後私の両親は事件に巻き込まれて死んだ。そのせいで私は自分の住んでたところを立て祖父母に引き取られた。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

＃3　ワンフォーオール

サイド緑谷

僕は今少し絶望している。さっきオールマイトの言葉がまだ頭に残っている。わかっていた。ああ言われるとわかっていた。でもなんで納得できないのだろう。やっぱり諦め切れないのだろうか。でも僕は無個性だ。ヒーローになれるなんて思っちゃダメなんだ。でもやっぱり諦め切れてない自分もいる。そもそもなんでヒーローになれるなんてことを思っていたのだろう。確か幼稚園の時、友達に何か言われて希望を持った気がする。でもなんでか思い出せない。そんなことを考えながら歩いてた。いつの間にかいつものくせでヴィランが暴れている場所へ来てしまった。ふと覗いてみたらさっきのヴィランが暴れていた。そしてかっちゃんが捕まってた。そしてかっちゃんの顔を見て幼稚園の時の友達が言ったことを思い出した

［結局、個性がなくても命を投げ捨てる覚悟と人を助けたいって想いがあるなら立派なヒーローって訳よ。］

次の瞬間僕は走っていた。

ーーー数分後ーーー

結論から言うとあの後近くで見ていたオールマイトが助けに来てくれた。僕はこっ酷くヒーローたちに叱られた。そして解放された。その後かっちゃんが僕になんか言ってきた。タフネス。そして今僕は帰路についている。さっき頭の中で蘇った言葉は誰が言ってたのだろうか?確か女の子で、本名と自分が読んで欲しかったあだ名の共通点がなかった子だった気がする。そしてなんでヒーローを目指したいと思った理由がその子が言っていたさっき頭の中で流れたさっきの言葉が理由だった気がする。でもその子が思い出せない。でも今目の前にオールマイトがいる。

「オールマイト、僕に何か用ですか?」

「君に礼と提案しに来た。その前に聞きたいことがある。」

「なんでしょう?」

「まず訂正からだ。さっきはあんなことを言ってしまった。しかしさっき君が起こした行動、それをみて確信した。君はヒーローになれる。」

「!!」

その時僕の目から涙が溢れてきた。昔お母さんが言ってたことを思い出した。お母さん、僕は謝って欲しかったわけではないんだ。あの子のようにヒーローになれるって言って欲しかったんだ。

「そして提案の前に質問だ。」

「はい。」
「君はなぜヴィランの捕まっていた彼を助けるために走り出した？」
「・・・わかりません」
「そうか」
「でも、かっちゃんを助けるために走り出す前に幼稚園の頃の友達の言ってたことを思い出したんです。」
「なぜだい？」
「わかりません、でも急にその子が言った言葉が頭に蘇ってきたんです。」
「・・・ちなみに、その友達はなんて言ってたんだ？」
「確か、〔個性がなくても命を投げ捨てる覚悟と人を助けたいって想いがあるなら立派なヒーローだ。〕って言ってました。」
「そうか、いいことを言う友達がいたんだな。そんな君に提案したい。」
「なんでしょう？」
「私の個性『ワン・フォー・オール』を受け継いでみないか？」
「・・・はい？」
「私の個性は人から受け継がれてきたものなんだよ。そしてさっきの君の行動を見て思った。君はこの個性を受け継ぐにふさわしいものだと。どうだい？受け継いでみな

いかい？」

答えはもう決まっている。

「はい！」

＃４雄英入試

サイド　緑谷

オールマイトは自分の髪を一本抜いて僕に向けて言った。

「食え」

その瞬間、今日の入試が一気に不安になった。でも『ワン・フォー・オール』を手に入れるためにそれを飲み込んだ。これで本当に大丈夫なのだろうか。

サイド　フレンダ

私は今雄英高校入試に向かっている。一応この日の為に色々と作戦を練っているわけではない。いや、そもそも作戦ねれなくない？筆記試験はともかく謎の多い実技試験。少なくとも先生を倒せって言う試験じゃないといいな（切実な願い）。

ちなみに今日に服装は受験だから制服に黒いベレー帽。ベレー帽をかぶってる理由？ご想像にお任せします。

ーーーーー数分後ーーーー

雄英高校正門から大体２～５ｍ離れた所に到着。第一声

「校舎でっか!!」
である。
しかも立体的なHの形をしてるし。学園都市でもこんな形の校舎なかったのに。
まぁここ学園都市どころか能力開発自体存在しないし、そもそも世界が違うからこんなこと考えても意味がない。
そんなことを考えてると
「どけデク！」
「かっちゃん!!」
「俺の前に立つな！殺すぞ！」
そんな会話が前から聞こえた。そこには私にとって懐かしい人物がいた。
そして私はなんとなく走り出した。

サイド　緑谷
（以前とは違うんだ、踏み出せ・・・!!目標への第一歩を！）
そう考えて僕は倒れていった。
（これだよ）
しかしいつまで経っても地面にぶつからない。なぜなら僕は浮いてたから。

？「大丈夫？」
緑「え！」
？「ごめんね、これ私の個性なんだ。でも転んじゃったら縁起悪いもんね。お互い頑張ろう。」
そう言ってその良い人は去っていった。そして僕は思った。
緑（女子と喋っちゃった。）フ「女子と喋っちゃった。」緑（・・・え？）
自分が思ってたことが誰かが声に出して聞こえた。声は後ろから聞こえたから恐る恐る後ろを振り向いた。そこには黒いベレー帽で金髪でどこかで見たことがある女の子がいた。でもどこで見たかは覚えていない。
フ「結局、図星だった訳よ。なんかごめんね。」
緑「え?!あ、はい。」
フ「・・・なんか昔より礼儀正しくなったわね緑谷。」
緑（なんで僕の名前を？てゆーうか昔？）
フ「・・・結局、覚えてないって訳よ。まぁ９年前だもんね。」
緑「え？」
フ「まぁ良いや。爆豪に頑張って、て言っといて。」
そう言ってその少女は僕を追い越して会場へ向かっていった。

（また女子と喋っちゃった！でもどこかで見たことあるんだよなぁ～あの子。）
そう思いながら僕は試験会場へ向かった。
ーーーーー試験会場にてーーーーー
『今日は俺なライブへようこそー！エヴィバディセイヘイ!!!』
「・・・・・」
『こいつはシヴィー!!!実技試験の概要をさくっとプレゼンするぜ!!』
そう行ってボイスヒーロー「プレゼント・マイク」は試験の説明を始めた。
か「同校同士で協力させねぇってことか。」
かっちゃんがそう言たから確認した。
緑「本当だ。受験番号連番なのにね。」
「見んな、殺すぞ。」
「あっ、ごめん。」
「テメェをつぶせねぇじゃねぇか。」
（物騒。）
そこで僕は校門であったことを思い出した。
「そう言えばかっちゃん。」
「あぁ？」

「校門で会った人がかっちゃんに〔頑張って〕って言ってたよ。」
「誰が言ったんだよそれ。」
「わかんない。名前聞き忘れちゃったから。でも９年前にあったことがあるみたいだよ。」
「どんな見た目をしてたんだよ。」
「金髪で、黒いベレー帽をかぶってたよ。あ、あと『結局～な訳よ』って言ってたよ。」
「・・あいつか？」
「え！かっちゃんわかるの？」
「いや、確かに金髪のやろーはいなかったが、口癖？がそれだった奴がいたじゃねぇかクソナード。」
「え、いた?!」
「はぁ～」

サイド　フレンダ

私は試験会場Ｅへ向かってた。さっき緑谷に話しかけた時、覚悟はしていたけどやっぱり忘れられていたことはショックだった。でも結局、会えることはできたからそれだけでもよかった訳よ。それに多分、きっと緑谷はヒーロー科を合格すると思う。なぜっ

て？元暗部組織アイテムでリーダーに真っ二つにされた馬鹿野郎の勘。言い過ぎだって？黙っとけ。

ーーーーー試験会場Ｅに到着してーーーーー

私は個性の点検、そして爆弾の準備をしていた。

モブ１「おい、あいつなんかぬいぐるみや、ミサイルみたいなの出してるぞ。」ヒソヒソ

モブ２「本当だ。あのぬいぐるみや、ミサイル、、あれがあいつの〝個性〟か？」ヒソヒソ

モブ３「多分そうだろ。にしてもあのぬいぐるみ、あまり可愛くねぇな。それになんか服装がジャージとかじゃなくてなんか制服だし。やる気あんのか？」ヒソヒソ

キコエテマスヨー。

〝グゥーー〟

突然私のお腹が空く音がした。まだあと試験開始まであと数十秒あるから大丈夫だと思ってあるものを取り出した。

モ１「おい、あいつまた変なもの出したぞ。」ヒソヒソ

モ２「あれは・・・まさか鯖缶?!」ヒソヒソ

モ３「しかも食べ始めたぞ。マジでやる気あんのか？」ヒソヒソ

そんな会話を聞きながら私は鯖缶を食べ終えた。でも結局、鯖缶はカレーが一番ってわけよ。

そんなこんなで鯖缶を食べ終わって、また〝個性〟の点検をしていた時、

「はい、スタート」

そんな声が聞こえたからすぐに会場内に走り出した。でも他の人たちはまだ固まってた。

『どうしたあ!?実践じゃカウントなんざねぇんだよ!!走れ走れ!!』

『賽は投げられてんぞ!!?』

こうして入学試験が始まった。

＃5　入試デスヨ

『標的補足!ブッコｒ「はいはいうるさいよ～。」
〝ドガーン!〟〝ズガガーン!〟
実技試験開始から2分、私は小型ミサイルや人形やらをロボットを見つけ次第投げている。
壊しているときに
（この状況、何かに似てる）
と思ったら
（あぁ～学園都市にいたときの夏、よくわかんない依頼で駆動鎧を壊しまくる作業に似てる。）
とある科学の超電磁砲第１８話以降参照
ことに気付いた。
（あの頃、麦野に殺されることになるとは思ってなかったんだな～）
そんな思い出を振り返っていた。
ちなみに今のところ２４ｐ集めてる。ポイントもうちょっと必要かなと思って動い

てたらロボットに襲われそうな子が結構いた。申し訳ないけどその子たちを襲いそうなロボットを破壊した。

なんとなく

「大丈夫だった?!」

と聞くと

モ１「大丈夫！ありがとー！」

モ２「助かった！」

そんな感じにロボットを横取りするついでに助けてたら結構お礼を言われた。

「どういたしまして！」

お礼を言われるのは悪くない。そんなことを考えながら時間が過ぎてゆく。

（もうそろそろ終わるかなぁ？）

そんなことを考えてた時、

〝どぉーん!!!!〟

０ｐのロボットが出てきた

（いや、デカすぎるでしょ！麦野の能力を真似していたやつよりでかいでしょ！）

とある科学の超電磁砲Ｓ最終回参照

思ったより大きかったことに驚いてるとそのロボットの真下に尻尾が生えた子が転

んでいた。
そしてロボットがその子に向かって腕を下ろした。
？「やべ、」
とりあえず私はその尻尾が生えた子ミサイルを向けて、
「そこの尻尾が生えてるやつ！しゃがんで！」
そう言った。その子は私が言ったことに気付いてすぐにしゃがんだ。それを確認して、私はミサイルを発射した。
〝ドガーン!!〟
無事爆発してロボットの腕を粉砕できた。でも近くにいた尻尾の子が心配で駆け寄った。
「急にごめん。」
？「いや、助かった！」
「どういたしまして大丈夫だった？」
？「あぁ平気だ。」
「そう、あんた名前は？」
尾白「俺は尾白猿夫だよ。」
「私は軍師輪。それじゃあ尾白、すぐに離れるよ。」

そう言って私は彼の腕を掴んでロボットから離れた。そしてロボットから距離をとって、
「ここまで来りゃちょうど良いってわけよ。」
そう言って私はミサイルを合計６つ両手に持った。
「え～と軍師さん？何すんの？」
「良いから見てれば良いのよ！」
そして私は０Ｐのロボットに向かってミサイルを発射した。
〝ドガーン!!〟人間で言うところの右肩あたりに命中
〝ドゴォーン!!〟左肩あたりに命中
〝バコォーン!!〟〝ズガァーン!!〟〝ドォーン!!〟〝バカーン!!〟胸や腹あたりに命中
ミサイルが当たった場所、右腕と左腕は外れかけていて、胴体の部分はボロボロになってた。
でもそれでも動いてた。
「しぶといわね！でも結局、これが当たったらもう終わりって訳よ！」
私は着ていたブレザーのボタンを外して懐をロボットに向けて広げた。

サイド　尾白

俺は雄英高校、実技試験を受けていた。順調にポイントを稼いでると０ｐのロボットが出てきた。他の奴らは逃げていた、でも俺は転んだせいで逃げ遅れていた。気付いたらロボットは俺に向けて腕を振り下ろしていた。

「やべ、」

俺は死を確信した。その時

「そこの尻尾が生えてるやつ！しゃがんで！」

その声が聞こえた瞬間、俺はすぐにしゃがんだ。

そしたらそのロボットの腕にミサイルが飛んできて爆発した。

危機一髪だった。そして声の主がこっちに駆け寄ってきた。その主は金髪で、黒がメインの制服を着ていた。

（なぜジャージじゃなくて制服?!そしてなぜ金髪?!帰国子女か?!）

その疑問俺の頭の中にあった。

（そういえばこの子試験始まる前に食事してた子じゃん！）

そう思ってたら彼女は

「急にごめん。」

と言ってきた。

「いや、助かった！」
？「どういたしまして大丈夫だった？」
さっきの爆発のことだろう
「あぁ大丈夫だ。」
そう答えた。
？「そう、あんた名前は？」
名前を聞かれすぐに答えた。
「俺は尾白猿夫だよ。」
軍師「私は軍師輪。それじゃあ尾白、すぐに離れるよ。」
そう言って彼女は俺の腕を掴んで離れた。大体５０ｍくらい離れた時、軍師さんＯｐロボットの方を向いた。
「ここまで来りゃちょうど良いってわけよ。」
そう言って彼女は短いスカートの中からミサイルを合計６つ取り出した。
俺は彼女が何をしようとしてるかわからなかった。でもとりあえず
「え～と軍師さん？何すんの？」
そう聞いたら
「良いから見てれば良いのよ！」

という回答が来たから黙って見ることにした。
そして彼女は０ｐのロボットに向かってミサイルを発射した。そのミサイルは見事に右肩、左肩と胴体に命中した。
（すごー！全部いい位置に命中した。これが彼女の⊠個性⊠か？⊠百発百中⊠とかか？）
そんなことを考えてた。
「しぶといわね！でも結局、これが当たったらもう終わりって訳よ！」
彼女はそう言った。そして彼女はブレザーのボタンを全部外して懐をロボットに向けて広げた。次の瞬間、彼女の懐から１ｍくらいの大きさのミサイルが発射された。そのミサイルは見事に０ｐロボットの頭に着弾し、爆発が起きた。突如
『終了～～～!!!』
の合図が聞こえた。
「・・・・・・え？」
試験が終了したことじゃなくて０ｐロボットに発射されたミサイルとそのロボットの破壊に対した声が出た。
モ１「あの女がミサイル取り出してそれがロボットの頭に着弾したぞ！」
モ２「え、マジで?!」
モ３「そう言えばあの女、始まる前に鯖缶食ってた女じゃねーか！」

モ１「え、じゃああいつ実力者だったのか?!」
モ２「じゃあ俺たちを油断させるための演技だったのか?!」
などなど、そんな会話が聞こえてきた。
「え～と軍師さん?」
「どうしたの?」
「今のは?」
「アメリカで使われてる対戦車ミサイル〝ジャベリン〟よ。」
「それを使ってあれを壊したの?」
「そうだけど・・・それがどうしたの?」
う・そ・で・しょ!
「軍師さんの〝個性〟って何?」
「私の個性は爆弾、爆発物の生成よ。」
「それであのミサイルを作ったと、」
「そうね。あれ以上に強力なミサイル、例えば水爆などの核爆弾とかね。」
頭おかしいこの子

サイド　フレンダ

尾白になんか変な顔をされ、周りの人たちが私について話していた。アメリカの対戦車用ミサイル使ったのそんなに変だったかなぁ？

天の声「違うそこじゃない」

・・・なんか変な声聞こえたけど無視しよう。

天の声「無視しないで」

うるさいなぁ

天の声「ひどくない？ピエン」

良い加減だまんねぇと首の骨へし折るぞ（圧）

天の声「・・・」

ダマリマース

そんな感じにポケ～トポケポケ過ごしてたら

？「はいお疲れ様～～ハリボーお食べー。」

そう言いながらフレメアと同じかそれより少し小さいかぐらいの婆さん、リカバリーガールが近づいてきた。

その婆さんが私たちの近くにやってきた。まず０Ｐロボットを見た。そして私の方を向いた。

リ「アンタかい、このロボットを破壊したのは？」

「はい、私が壊しました。」
「そうかい、そうかい。まさか1日に2機破壊されるなんて、こんなの初めてだよ。」
尾「・・え!他の会場でも破壊されてたんですか?」
リ「そうだよ。それよりアンタたち怪我ないかい?」
尾、輪「ありません。」
そう答えたら婆さんが私の方を向いた。そしてしばらく考えてこう言ってきた。
「アンタ、『ウェポンヒーロー　リューミー』、軍師龍史の娘かい?」
その時私は驚いた。
「父をご存知なんですか?」
「そりゃ～あの子はこの学校出身だし、何よりあの子が学生の時、あの子の〝個性〟のせいで怪我した生徒がたくさん保健室に運ばれていたからねぇ。」
(?ω?;)は?
ちょっとまって、えぇっと?つまり?あの野郎ヒーロー志望なのに将来同期となる人たちにけがさせまくったと言うこと?
彼女の思考状態:(??)→(?·⊠?·)→—(…3　」∠)—
父よ、あなたと言う人は、、なんつー事をやらかしてんねん!
怪我させタァ?!テメェ何しとんじゃ!このハゲ!ボケ!この戦闘民族!学生同士の

戦争は２０００年に公開された映画『バトル・ロワイヤル』だけにしろ!!

彼女の思考状態：(´??ρ??、) →（▪ ▪）→（— —）→（ ´ ▽ 、 ）

ふぅ～落ち着いた。とりあえずこの婆さんに言うことはただ一つ！

「生前、父がご迷惑をおかけしました!!!」m（ ˙ ˍ ˙）m

「いや、アンタが土下座する必要はないんだよ。」

「いや、でも、あのハゲは死んでも私の実の父なので、父の犯した罪は私が謝罪しないと気が済みません!!」

その後私はしばらくリカバリーガールが次の会場に行くまで土下座していた。

ーーーーー1週間後ーーーーー

この1週間、私はサバ缶しか食べてなかった。今(朝食中)もサバ缶を食べていた。そんな時

祖母「アンタ、通知来るの今日、明日ぐらいかね?」

と聞かれた。

「そうだね。結局、通知が来るのは今日、明日、明後日、明々後日、明々明々後日くらいって訳よ。」

「長いわ!それにアンタ落ち着きなさいよ!」

「何言ってんのよ、ばあちゃん私は人類の手本になる程落ち着いてる訳よ。」

「家でも、学校でも、授業中でも、食事中でも、友達と遊んでいる中でも、サバ缶を食べてる奴は人類の手本にならねぇよ!!」

・・・ごもっともである。私の目の前には合計以２０個以上のサバ缶の空き缶が山積みにされてる。

「アンタいったい何個食べてんのよ!寝てる時はともかく、起きてる時!少なくとも２分に１個のペースで食べてるぞ!しかもサバ缶を１分以上摂取しなかったら動悸が激しくなって、手足が震えて幻覚も見えて。挙句の果てには発作を起こして病院行きになるし。お前の体どうなってるんだよ!!しかも今週サバ缶を合計６，７２０個買って８６０，１６０円かかってるんだぞ!８６０，１６０円!!!家がそこそこ裕福だったからよかったものの、一般家庭だったら大赤字だわ!!!」

「・・・でもサバ缶は体にいいって言うし。」

「数を考えろ!数を!」

・・・一つ食べ終わって新しいのを取り出す

カチカチ　ジー　ピキピキ　パカ　モグモグモグ

「はぁーダメだこりゃ。」

モグモグモグ

「あたしゃ今から新聞取ってくるからね。」

「わかった。」

モグモグモグ、モグモグモグ

（流石に食べすぎかなぁ？でも結局、サバ缶を食べてる間が一番落ち着く訳よ。・・・いや、いくら落ち着くからって学園都市ではこんなに食べてなかった訳よ。）

「りいいいいいいいいん!!!!!!!」

「ふぎゃ!!!!」

祖母が叫びながら家の中に戻ってきた。

「あ、あああああアンタ！ゆ、ゆゆゆ雄英から入試結果が届いたよ!!」

彼女の思考状態・・・（；゛。，ω。，）・・→（ ?☒? ）

祖母が驚きすぎて逆に冷静になれた。

「・・・よし、ばあちゃん！落ち着こう!!」

祖母の思考状態・・・（；゛。，ω。，）・・→（ ▪ ＿ ▪ ）→ (???)

「落ち着いた。」

「それじゃあばあちゃん！」

「なんだ輪!!」

「サバ缶くれ！」

「おぃ!!!!!!」

～～～しばらくお待ちください～～～

Ｉｎ　ｍｙ　自室

「よし！そんじゃ、結果をみましょうかね。」

ビリッ、コロ、　円盤状のものが封筒から出てきた。

（・・・なんだこれ？）

そう思ってたらその円盤からビデオが映し出された。

『私が投影された!!!』

そう言って映し出されたのはＮｏ．１トップヒーローのオールマイトだった。

（なぜオールマイト!!）

『ＨＡＨＡＨＡ　驚いたかな？私がここに写ってる理由、それはなんと!!』

（なんと?!）

『４月から私が雄英高校に勤めることになったからだよ！』

（マジで！学園都市では第１位どころかほかのＬｅｖｅｌ５は教師とか人助けとかしなかったのに！・・・いや、第３位超電磁砲は例外か、）

『そして合格発表だ！』

（よし、不合格になったときの精神安定剤としてのサバ缶は準備できてる。どんとこい！）

『筆記試験はほぼ満点だ！』
（よし！これで雄英高校入学は決まった！）
『そして実技試験だが、』
（よし、不合格になったときの精神安定ｚ）以下略
『敵Ｐ、４９Ｐ！一応合格点だ！』
「しょい!!!!」
『のみならず・・』
（はい？）
『審査制の救助活動ポイントがある!!』
（はい？）
『軍師少女！君の救助ポイント４８Ｐ!!』
（え?!）
『合計９７Ｐ!!首席合格だ!!』
「えええええええええ!!!!」
『こいよ軍師少女！ここが君のヒーローアカデミアだ!!!』
　それで映像が終わった。
「・・・ヨッショイ!!!!!」

「輪！合格したの?!」
「うん!!しかも首席で!!」
「本当かい?!よくやった!!!今夜はお赤飯だよ!!!」
こうして私がヒーローになるための生活が始まる。

#5．5　祖母孫喧嘩

サイド　祖父

ぐんしぎあん

▪どもぉ～～軍師輪の祖父の軍師儀庵で～す。いや～うちの孫娘の輪が雄英高校に首席で合格したと聞いた時、さすが親子だなぁ～と思いましたよ！うちの息子で輪にとっての父親、軍師龍史も雄英高校に首席で合格したからなぁ。まぁ、その後雄英に何度も息子に関しての呼び出しをくらいましたが。トホホ。

おっと、流れ弾が飛んできた。

▪そしてついさっきまで孫娘、輪の合格祝いとしてパーティーをしてたんですよ。さっきまで（←これ大事！）でも現在

「いい加減許可しろや!!このクソババァ!!!」

ぐんしみりあ

そう言って輪はミサイルを僕の妻で凛の祖母、軍師美梨亜に向かって放つ。

「許可する訳ないだろ!!このクソガキィ!!!」

そして妻はポケットからアサルトライフルを取り出し、輪が飛ばしてきたミサイル

や、爆弾に向かって撃つ。そう、現在この家は妻と孫娘の戦場になっているのだ。
スゴイシュール
～～～３５分前に遡る～～～
祖母「合格おめでとう！さすが私の孫だ！」
この時はクラッカーを鳴らしてすごく孫の合格によろこんでた。
輪「ありがとう！でも流石に主席は驚いたけどね！」
孫もお祝いされていることに喜んでいた。
祖父「でも龍史のように問題行動は起こすなよ。雄英高校に行くのめんどくさいんだから。」
僕は孫に念を押した。ここから雄英高校はかなり遠い。行くのに飛行機や、新幹線の乗り継ぎが必要なくらい。そして旅費がとんでもないものになる。それは是非ともやめて欲しい。
～～～１０分後～～～
３人仲良く夕飯を食べていた。しかし、次の輪の言葉で
「一人暮らししｔ「ダメに決まってるでしょ！」・・・」
この空間の時間が止まった。
「・・・なんでよ!!」

孫は怒鳴った。

「だって！アンタが人暮らししした暁には部屋がサバ缶だらけになっちゃうでしょ!!」

「くっそ！否定できない！でもここ何県だと思ってんのよ！山口県よ！山口！東京から遠いいどころか関東地方からだいぶ離れてるじゃない！」

確かに、結構離れてるから一人暮らししたい気持ちも分からなくはない。

「ここから通えばいいじゃないか！」

は？（？ω？；）

「無理に決まってるでしょ!!」

そりゃそうだ。

そこから二人の口喧嘩が始まった。

～～～5分後～～～

▪そして妻の美梨亜と孫が口喧嘩に疲れてやめた。

「どうやら婆ちゃんとは分かり合えないようね。」

「そうだな。ここからは「拳で語り合うしかない。」。」

いや、お前ら女だろ。拳じゃあダメだろ。

▪お互いのことをにらむ。その目はまるで人がゴキブリを前にして殺そうと決心する目だった。そして妻は僕に口パクで言ってきた。

［アンタの個性使ってこの部屋と食事と家具の〝時間〟を止めといて。］

その口の動きを見て僕はとっさにこの部屋にあるものと生物の〝時間〟を止めた。

次の瞬間・・・戦いが始まった。

▪まず、輪はスタングレネードをスカートから落とした。見事に美梨亜がひっかかった。そして輪は妻を囲むようにミサイルを五発放つ。しかし視界が戻ってない妻は腰からダブルアクションオンリーのＳ＆Ｗ６４２を取り出し五発空中に撃った。それが見事ミサイルに命中。その後、視界を取り戻した妻は８９式小銃を取り出し輪のいる方向へ撃つ。しかしその弾は一つも輪にあたらなかった。その後は輪が爆弾やミサイルなどを妻に投げて、それを〝個性〟で取り出した銃などを使って撃ち落とすの繰り返しだった。

～～～そして今に至る～～～

▪二人の２０分間の戦争が終結した。勝利の女神に選ばれたのはあやたｋゲフンゲフン。

、、、やり直し、、、

（ハショる）選ばれたのは僕の孫の輪だった。

▪なぜ輪が勝ったのか。その理由は二人の個性にある。妻の〝個性〟は輪の父親と同じく『あらゆる武器を生み出せる』〝個性〟。そして孫娘の輪の〝個性〟は『［あらゆる

爆弾や、爆薬、そして爆発するにあたって必要なもの」を無限に生み出す『〝個性〟だ。これだけ聞いたらあらゆる武器を生み出す妻の方が有利だと思うだろう。しかし、この二人の〝個性〟の共通点と相違点がある。共通点は『自分を含む人間の視界からしか武器を取り出せない（機械越しならセーフ）』点と『生み出すものの構造を正しく理解してないといけない』点だった。相違点は『デメリットや、副作用の違い。』だった。元々妻の個性は『生み出すに武器によって、体力をかなり消費する。生み出すものが大きければ大きいほど体力はかなり消費する。しかし生み出すものが小さいなら体力はあまり消費されない。数値で表すなら妻の体力はＭＡＸで１０００だ。小さいもの、例えば先ほど取り出したＳ＆Ｗ６４２は１０％体力を消費し、８９式小銃は２５％体力を消費する。弾頭ミサイルを出すとするなら体力は１５０％消費する。１０００％の体力を全て消費した場合、おそらく妻は１、２週間眠り続けるだろう。』これが妻の〝個性〟による副作用とデメリットだ。しかし孫の輪には『デメリットと副作用が存在しない。』理由は簡単だ。彼女の個性は父親の『あらゆる武器を生み出せる』〝個性〟と母親の『自分が持っているものを無限に取り出せる』〝個性〟の複合型だからだ。さっき孫の〝個性〟の部分に戻って欲しい。『「あらゆる爆弾や、爆薬、そして爆発するにあたって必要なもの」を無限に生み出す』〝個性〟だ。そう無限に生み出し続けられる〝個性〟だ。なぜ爆弾しか生み出せないかはわからない。しかし彼女は無限に生み出せる。体力や、エ

ネルギーの消費は無く、無限に生み出し続けられる。（↑大事なことだから2回書く）
（ＦＲＯＭ作者
説明長いのと無限という単語が多くてすみません）
▪だからこの戦いは時間との戦いでもある。妻と孫はお互いの攻撃に当たらない位置に動き続けている。そのちょっとした動きでも体力は消費される。結果的に妻は武器をたくさん生み続けたから体力は後１０％かそれ以下しか残っていない。だから
「私が勝ったんだから一人暮らしを認めなさい!!」
こうなる。
「それだけは無理だ!」
「なんでよ!」
「理由はさっき言った!」
やはり最後は口喧嘩になる。さっきに戦争をやった意味は・・・
「じゃあさあ、もういっそのことこの家売ってみんなで東京に引っ越そうよ。」
二人は口喧嘩をやめてこっちを向いた。
「「天才か?!」」
本日の勝敗
祖父　軍師儀庵の勝ち

＃6　個性把握テスト

時は遡ること1週間前、実技試験終了後の雄英高校教師陣。
？「実技総合成績が出ました。」
そう言って受験生の成績が開示された。
？「救助Ｐ０で２位だとはな!!」
？「他の受験生が後半鈍っていく中で、派手な〝個性〟で迎撃し続けたタフネスの賜物だ。」
そんな会話をして次の受験生に移る
？「対照的に敵Ｐ０で８位。」
？「アレに立ち向かったのは過去にもいたけど・・ぶっ飛ばしちゃったのは久しく見てなかったね。」
？「思わず〝ＹＥＡＨ！〟て言っちまったからな～～」
そんな会話をしている中、一人がこう呟いた。
？「ぶっ飛ばしたなら1位もそうだけどな。」
そう言った瞬間、その場の空気が変わった。

？「・・確かにそうだね。ぶっ飛ばしたなら1位の彼女も一緒だ。」
？「よく考えれば彼女の敵Ｐと救助Ｐの割合がちょうどいいのよね。」
？「敵Ｐ４９に救助Ｐ４８、結構いい線行ってるよな！」
？「しかも懐から生み出したミサイルでアレを倒しちゃうなんて・・」
？「彼女は自分の周りの状況をきちんと理解していて、なおかつあの時の状況でアレを倒すのにちょうどいいミサイルを生み出す。とても良い情報力と判断力だね。」
そんな感じに1位の子を褒めていた中、誰かが爆弾を落とした。
？「でもこの子、あのリューミーの娘ですよ。」
次はその場の空気が固まった。
？「・・・・・それは言わないで欲しかったな～」
ネズミなのかクマなのか犬なのかよく分からない生物（校長）が言った。
？「校長を丸焼きにして食べかけた人間として有名ですもんね。」
？「いくらあの人の娘だからって同じ結末にはならないでしょ。」
？「そうですよ。それに、多分この子サバ缶が主食だと思いますが。」
そして試験開始前の彼女が映し出された。
？「・・・この３人は俺のクラスで面倒見ます。」
包帯のようなものを首に巻いた教師が言った。

？「そうだね。相澤くんに任せた方が安心できるね。」
？「もしこの娘が父親と同じことをしたら除籍にすれば良いですしね。」

サイド　フレンダ

「扉でっか!!」
私は今、自分が1年間お世話になる教室の扉の前にいた。
（結局、異形型の能力者がいるだろうからそういう人たちでも安心して入れるためのバリアフリーって訳よ。）
そう考えながら私は扉を開けた。教室にはもう何人か席に座っていた。そしたら眼鏡をかけた『ザ・委員長』ぽいやつが近づいてきた。
「おはよう！ぼ、俺は私立聡明中学から来た飯田天哉だ！今日から1年間よろしく！」
「あぁ～うん、私は軍師輪よ。よろしく。」（こいつ世間知らずの坊ちゃんね。・・そう言えば入試の試験内容説明の時、緑谷注意してたやつか。正義感溢れてんなぁ～）
そんなことを考えながら私は自席についた。そして先生が来るまでの間、静かに待つことにしたがお腹が空く音がした。仕方がないからリュックに入れてきたサバ缶を食べることにした。
「軍師君！今は食事を取る時間じゃないぞ！」

来たよ。真面目な飯田君（めんどくさいの）が
「別に良いでしょ。私今朝、朝ご飯食べてきてないんだから（↑大嘘）」
「むっ、そうなのか。朝ごはんはしっかり取らない他ダメだぞ！」
ハイハイワカリマシタヨー（？凵？）ノ
〜〜〜数分後〜〜〜
柄の悪いヤンキーみたいなのが教室に入ってきた。私はそいつのことを知っていた。そいつが席に着いたのを確認して私はそいつに近づいた。
「久しぶり、爆豪！」
そう言ったら彼はこっちを見た。

サイド　爆豪
「久しぶり、爆豪！」
席に着いた俺を誰かが呼んだ。声がした方向を見るとそこには金髪で灰色のベレー帽を被ったモブがいた。俺は自分の記憶を辿った。・・辿った結果、金髪のモブはいなかった。しらねぇと言おうとしたが入試説明の時デクが言ったことを思い出した。
〝9年前にあったことがあるみたいだよ〟
〝金髪で、黒いベレー帽をかぶってたよ。あ、あと『結局〜な訳よ』って言ってたよ。

〃

それに当てはまる人物は記憶の中にいた。金髪ではなかったが、おそらく

「フレンダか?」

そう聞いたら

「あったりぃ!緑谷と違って記憶力いいね!」

褒められた。いつも他の奴らから褒められると見下されてるように感じる。しかしこいつに褒められても悪い気はしなかった。

「久しぶりだな、っていうかなんで金髪なんだよ。」

「あぁ、9年前引っ越してからしばらくした時個性事故に巻き込まれて地毛が金髪になったんだ。今ではこれに慣れてるからわざわざ黒に染めてないの。」

なるほど。モブの個性で金髪になった。どういう個性なんだ?そんな感じに考えてたら

「机に足をかけるな!雄英の先輩方などに申し訳ないと思わないのか?!」

なんかめんどくさいのが来た。

「おもわねぇーよ、テメェどこ中だよ!」

「ぼ、俺は聡明中学出身の飯田天哉だ。」

うわ、こいつエリートか。じゃあこいつ坊ちゃんだな。

「聡明～!?クソエリートじゃねぇか、ぶっ殺し害がありそうだなぁ。」
「君、ひどいな！本当にヒーロー志望か?!」
　ウゼェな。今ここでぶっ殺してやろうか。
「飯田、こいつはこういうやつだから諦めな。」
「軍師君?!どういう意味だ！」
「ヒーロー志望の人でもいろいろな人間がいるんだから。」
　よくわかってんじゃねぇかフレンダ。
　そんなクソみたいな会話をしてたらデクが扉のところにいた。それに気づいたメガネ野郎がデクの方へ向かった。
「やっぱり緑谷、受かってたんだね。」
「ど～せ不正でもしたんだろ、じゃねぇとは入れねぇよ。」
　そうに決まってる。無個性がそもそもヒーロー科に入れねぇ。ぜってぇ裏があるはずだ。そう考えていた。
「多分救助Pをたくさん稼いだんじゃない？」
　は？救助P？
「なんだよそれ。」
「アレ？救助P知らないの？」

「しらねぇよ。敵Ｐ７０で合格したんだからヨォ～」
「あぁ～じゃあ知らないか。あの試験は敵Ｐだけじゃなくて教師陣の審査制の救助Ｐがあった訳よ。多分緑谷のことだから他の受験生を助けまくって合格したんじゃない？」
そんなのがあったのか。知らなかった。じゃあ、あのデクもそれで稼いだのか？いや、それでも無個性が合格できるわけがない。入試のことはともかくぜってぇ～裏があるはずだ。
？「お友達ごっこがしたいなら他所へ行け。ここはヒーロー科だぞ。」
(((なんかいるぅ！)))
全員がそう思っただろう。
そう言って寝袋に入ってたおっさんが教室に入ってきた。
？「ハイ、静かになるまで8秒かかりました。君たちは合理性に欠くね。」
なんだあいつ。雄英にいるってことはヒーローか？
「君たちの担任の相澤消太だ。」
こいつ担任か?!
「早速だが、体操服着てグラウンドに出ろ。」

サイド　フレンダ

「「「個性把握テストォ??!!!!!」」」
うちの担任の相澤が言った。
個性把握テスト？知らない子ですね？
？「入学式は?!ガイダンスは?!」
さっき緑谷と話してた茶髪で丸顔の女子が叫んだ。
「雄英は〝自由〟が売り文句、そしてそれは〝教師側〟も然り。」
それを聞いた瞬間２１人中、一人を除いたの頭上に?が浮かんだ。しかし
「確かに、〝自由〟が売り文句なら入学式サボっても怒られないわけか。」
私は理解できていた。
「そういうこと。よくわかってんな軍師。」
褒められた。嬉しくないけど。
「中学からやってんだろ〝個性〟禁止の体力テスト。・・爆豪、中学の頃ソフトボール投げ何ｍだった？」
相澤が爆豪に聞いた。なぜ爆豪？
「６７ｍだ。」
爆豪が素直に答えた。よし、爆豪に勝った。私６９ｍ。だって爆弾投げると際に腕力がないとヤバいことになるんだもん。

「じゃあ〝個性〟ありでやってみろ。円からでないなら何してもいいぞ。」
それを聞いた瞬間、私は相澤が爆豪を選んだ理由を理解した。爆豪の能力は学園都市風に言えば『爆破能力』(ボマーハンド)。掌で爆発を起こす能力。そしてボールを投げる際に爆風に乗せれば・・
「死ねぇ!!!!」
・・・・死ね?
結果　７０５．２ｍ
・・マジか。
「まず自分の最大限を知る、それがヒーローの素を形成する合理的手段。」
それを聞いた時思った
?「すげ～面白そう!」
?「７０５ｍってまじか!」
?「〝個性〟を思いっきり使えるなんてさすがヒーロー科!」
おい、それ言っちゃったら
「面白そうか・・・君たちはこれからの3年間、そんな気持ちで過ごすのか?」
ほら、こうなっちゃうじゃん。
「よし、トータル成績最下位の者は見込み無しと判断し除籍処分としよう。」

は？（　。　д。）

「「「はあああああああ?!」」」

▪生徒の如何は先生の〝自由〟。ようこそこれが

▪雄英高校ヒーロー科だ！」

・・なるほど、こういうのもアリだったのか。・・・結局相澤は本気な訳よ。でも、もし最下位でも見込みがあるなら除籍されない可能性があるわね。逆に最下位じゃなくても見込みなしと判断されれば除籍処分される可能性もある。・・でもこの体力テスト、私の能力じゃあ、あまり使えないかも。

？「最下位除籍って、入学初日ですよ!?いくらなんでも理不尽すぎる!!」

まぁ普通そうだよね。普通はそういう反応するよね。私だってまだ少し驚いてるもん。

「自然災害、大事故、身勝手な敵たち。いつどこから来るかわからない厄災。日本は理不尽にまみれてる。そういう理不尽を覆していくのがヒーロー。放課後マックで談笑したかったならお生憎様、これから3年間雄英は全力で君達に苦難を与え続ける。〝ＰＬＵＳ　ＵＬＴＲＡ〟さ。」

・・まぁ頑張りますか。

ーーーーーーーーーーーーーー

一種目５０ｍ走

あの飯田の能力、面白いわね。確か、『エンジン』だったっけ？足からなんか生えてるし、その力のおかげでスピードが速くなってる。学園都市風に名前つけるとしたら『脚力強化』（エンジン）。おそらくＬｅｖｅｌ３～４かな？飯田と一緒に走ってたカエルっぽい子は・・わからないや。

ちなみに私の出席番号は４番、意外と早く順番がきた。

「おぉ、尾白じゃん入試の日以来だね。」

隣には以前助けた彼がいた。

「確か軍師さん、だっけ？」

おぉ、覚えててくれた。嬉しい。

「あたりあたり。よろしくね。、ところで尾白の能、〝個性〟はその尻尾？」

「そうだよ。」

そんな会話をして私たちは走り出した。

結果 ☒７．１９☒

この種目、使っても良かったけど隣に人がいるから使えなかった。でも去年より１秒縮まった。

その後、他のクラスメイトの能力を見てた。確か無駄にキラキラしたビームを撃って

たのは青山・・だっけ?麦野の『原子崩し』に似てるなぁ～。・・アレで『ふれ／んだ』にされなければいいけど。そこまで威力はなさそうだから大丈夫か。でも爆豪の能力、９年前に比べたら結構威力上がってんなぁー。あの時はＬｅｖｅｌ２ぐらいだったけど、今なら飯田と同じＬｅｖｅｌ４ぐらいかな?緑谷は使えないだろうけど頑張ってるなら大丈夫でしょ。知らんけど。

２種目　握力

これも個性の使いようがないから普通にやった。

結果　５８ｋｇｗ

・・去年より８上がったけど周りを見るとまぁまぁぐらいね。そんな感じに思ってると

?「すげー!５４０ｋｇｗって!!あんたゴリラ?!たこ?!」

・・・頑張ろう私（泣）

３種目　立ち幅跳び

よし、これなら希望がある。でも二人いっぺんにか・・・。

「相澤先生!個性の都合上、最後に飛んでいいですか?!」

「・・・いいだろう」

ショイ!!勝った。

まぁ、最後まで気軽に待ちますか。

サイド　緑谷

立ち幅跳びで自分の番が終わって後は次の種目を待つだけだった。ヤバい。全く個性をつかえてない。どうしよう。ま、まだ大丈夫だよね。だって後5種目あるから。

その間にワンフォーオールの調節ができるようにならないと。

そんな時。

？「あの子まだ〝個性〟使ってないよね。」

？「相性が悪い〝個性〟なのかな？」

そんな会話が聞こえてきた。今、最後の子が跳ぼうとしている。その子はベレー帽を被った金髪の子だった。見覚えがある気がしたから記憶を辿ると入試の日、僕を応援してくれた人だった。そういえばさっきかっちゃんと話していた気がする。・・そう言えば入試の日、9年ぶりって言ってたなぁ～。

そう言えばあの子が〝個性〟使ってるところまだ見てない気がする。あの子も使うと怪我するのかなぁ？

？「でも最後にやりたいってことは危険な力なのかな？」

尾「あぁ～、あながち間違ってないかも」

そんな会話が聞こえた。
「じゃあ軍師、跳べ。」
そう言われて彼女は跳んだ。
？「アレ？なんかふつー。」
？「まさか恥ずかしかったとか？」
そんなふうに話していた。・・アレ？何か三角錐？みたいな物を背中から落とした？と思ったら、彼女が落としたものが急に爆発した。
？「うわぁ！爆発した！」
？「なんだあれ！」
そしてその爆発の衝撃に身を任せて遠くへ跳んだ。彼女は地面に足が近づく度ソレを落とした。

サイド　フレンダ
結果　１０．３ｍ
だった。いやぁ～上手くいってよかった～。ちょっと危なかったけどまぁ結果オーライ。腹筋痛い。
？「すごかったね！あれ君の〝個性〟？」

「そうだけど・・あんた誰？」
麗「あぁ、そうだった。私は麗日お茶子。よろしくね。」
「私は軍師輪。よろしく。」
新しい友達ができました。
「おい、軍師。」
相澤が私を呼んだ。
「なんですか先生？」
「さっきのはなんだ。」
「爆弾ですけど？」
何を今更？教師ならもうとっくに知ってるはずじゃあ？
麗「そういうことじゃないと思うよ輪ちゃん。」
ん？じゃあどういうこと？
「アレはどういう爆弾だ。」
あぁ、つまり先生はさっき私が作った爆弾がきになるのね。
「アレは私が作り上げた（半分嘘）破片効果のない衝撃波に絞った小型爆弾ですよ。」
「そうか。・・・なるべくアレを使わないように。」
ハ～イ

先生はそう言って次の種目に移った。
４種目　反復横跳び
あの葡萄すごいな。どういう原理で跳ね返ってんの？
もしかしたらＬｅｖｅｌ３ぐらいね。
「次、４番。」
お、私の番だ。
結果　６２回
・・・普通？だな。
今のところ立ち幅跳びでしか能力を使えてない。・・まぁ最下位は逃れられる・・・かも。
でもさっきから緑谷、あまり結果出してないなぁ。まぁしょうがないんだろうけど。いくらあの相澤でもそこんとこ理解してると思うけど。あ、爆豪なら心配いらないでしょ。あいつ才能あるから。
５種目　ソフトボール投げ。
結構飛ばせる人いるなぁ～。でもやっぱり爆豪の記録を上回るやつはいないｎ
「すげぇ!!∞が出たぞ!!」
・・・マジか。え、しかも麗日?!あいつめ、、

「お疲れ～麗日。」
「ありがとう輪ｃｈ、何で般若の顔してんの?!!怖い!!」
おやおや、顔には出ちゃってたみたいだな。
「結局、自分の番の前に∞が出ちゃったらやりづらいって訳よ。」
「あ、ご、ごめん。」
「あ、別にいいよ。」
別に怒ってないんだけどなぁ。
「ところで麗日の能、〝個性〟って何?念動力?」
「違うよ～。私の〝個性〟は『ゼログラビティ』。五本指で触った物の引力をなくせるんだ～。でもキャパオーバーすると気持ち悪くなって吐いちゃう。」
なるほど。学園都市風に言ったら『重力消去』(ゼログラビティ)。Ｌｅｖｅｌ４?でも副作用として吐くんなら3?まぁいっか。どっちにしろ強いわね。
「軍師、早くやれ。」
また相澤に呼ばれた。
「は～い、今行きま～す。」

サイド　麗日

▪輪ちゃんがボールを持った。彼女の個性は爆弾?かな?それなりに強そうだけど、このテストにはむいてないかも・・。さっき幅跳びの時だってちょっと危なかったし。まぁ、一応最下位は大丈夫だと思うけど。どちらかというとこの入試の時に助けてくれた、緑谷?くんが心配だなぁ～。

「風速前方二、距離は大体３８あたり、軌道を予測。」

輪ちゃんがそんなことを呟き始めた。何でだろ?

そしたら急にボールを投げた。そしたらズボンについてるポケットに右手を入れた。そして右手を出した時、サメの顔が描かれた何かを持っていた。

「予測どおりの軌道、そして狙いはボールじゃなくて、ボールが落ちると思われる地点の一歩手前!」

そう言ってその何かが発射された。おそらくミサイルだと思う。そしてボールが地面につくと予想した場所の一歩手前に着弾して、その爆風にボールを乗せてボールを遠くへとばす。多分さっきの幅跳びの時と真似したのかな?その後は幅跳びと一緒、ミサイルを何回も撃った。

サイド　フレンダ

結果　７５０ｍ

ミサイルの威力が高かったからミサイルを数回飛ばしただけで済んだ。

▪そしてテストの残る種目は3つ。今の気持ちを絹旗風に言えば

［超めんどくさいです。早く終わらせて超家に帰りたいんですけど。］って訳よ。

▪あ、次緑谷の番だ。

「緑谷くんこのままだとヤバいぞ。」

「あたりめーだ。無個性のザコだぞあいつ。」

爆豪?それ言っちゃーかわいそうでしょ。せめてオブラートに包んで。それに少なくとも筋肉はそれなりについてるから雑魚とは限らない訳よ。

「無個性?!彼が入試の時何をやったのか知らんのか?」

?あいつが何かしたの?

そしたら緑谷がボールを投げた。

「４６ｍ」

緑谷の顔が何かに驚いた顔をしていた。

「な・・今確かに使おうと思ったのに・・・。」

ん?使おうって何を?

「〝個性〟を消した。つくづくあの入試は合理性に欠くよ。お前みたいな奴も合格できてしまう。」

▪周りは〝個性〟を消したことに驚いてる。しかし私は別のことに驚いてる。相澤最初なんて言った？緑谷の〝個性〟を消した？消したっていうことはあいつ〝個性〟を持ってたってこと？持ってないと消せないもん。

「消した・・！あのゴーグル・・！そうか！見ただけで〝個性〟を抹消する〝個性〟、抹消ヒーローイレイザー・ヘッド！」

　見ただけで〝個性〟を消せる能力か、『能力抹消』（ＡＩＭイレイザー）・・研究価値結構あるんじゃない？ワンチャンＬｅｖｅｌ５になるんじゃ、

「イレイザー？俺知らない。」

「名前だけなら見たことある！アングラ系ヒーローだよ！」

▪周りは珍しい能力と先生に驚いているが、私はさっきの疑問で頭がいっぱいになった。そう言えばさっき飯田が緑谷が何かをしたって言ってたな？聞いてみよう。

「飯田、入試の時緑谷が何したの？」

「あぁ軍師君、緑谷君は入試の時無重力女子を助けるためにあの０Ｐのロボットを比喩ではなく思いっきり吹っ飛ばしたんだ。」

▪・・・あいつ、個性を持ってたの?!・・・それとも幻想御手（レベルアッパー）でも使ったの？・・いや、普通に〝個性〟が目覚めたのかな？じゃなきゃ吹っ飛ばせられないし。・・・でも〝個性〟の発現は遅すぎない？

「そして吹っ飛ばす際に右腕と両足の骨がボロボロになってて、しかも赤黒くなってな。全く制御できてなかったみたいだったな。」

▪その話を聞き終わった時、背後からなんかの視線を感じた。学園都市にいた頃色々な修羅場を超えてきたからこういう視線を感じるのに敏感になった。そして視線を送ってた主がいると思われる方向を見た。・・何してんねんオールマイト！・・あんたは緑谷の保護者か?!・・保護者?・・まさかあいつの〝個性〟、オールマイトが関わっているんじゃ?・・わからないわねぇ～。・・・まぁ、いっか。もう、どうにでもなれ！（やけくそ）

サイド　緑谷

「見たとこ〝個性〟を制御できてないんだろ。また行動不能になって誰かに救けてもらうつもりだったのか?」

「そっそんなつもりじゃ！」

僕は否定した。

「どういうつもりでも、周りはそうせざるを得なくなるって話だ。」

「・・！」

「昔とあるヒーローが一人で千人以上助け出すという伝説を作り出した。同じ蛮勇でも

お前は一人助け出して木偶の坊になるだけ、緑谷出久、お前の力じゃあヒーローになれねぇよ。」

・・・何も言えなかった。

「〝個性〟は戻した。ボール投げは2回だ。とっとと投げな。」

サイド　フレンダ

緑谷が相澤と話終わった。

・・なるほど、おそらく緑谷は右腕をボロッボロにしてボールを飛ばそうとした。そしてそれを予測した相澤が能力を使って止めたと。

〝個性〟を持ってることに驚きだけど、このまま何一つあいつが成長してないと除籍だぞ。大丈夫なのか？

他の奴らは相澤が緑谷に何を話したのか気になっていた。他の奴らは聞こえなかったのだろう。・・え？何で私は聞こえたかって？・・世の中には知らない方がいいこともあるんですよ読者さん。

そしたら緑谷がブツブツ何か独り言を始めた。そんで何かを掴んだのか、またボールを投げるポーズになる。そしたら・・・何あのバカ力。何なん？あれ？・・っていうか指！赤黒くなってる。入試の時もあんな感じになってたのかな？なるなる（訳：なるほ

ど）その力を腕に込めてあの０Ｐロボットも吹っ飛ばしたのか。なるなる。
「先生、まだ動けます。」
「こいつ！」
おぉ相澤、緑谷の事認めたな？こりゃ除籍は免れるかな？
「やっとヒーローらしい結果出したよ！」
麗日は緑谷の結果に喜んでいる。そして他の奴らはそれぞれ反応は違っていた。しかし爆豪はすごく驚いてた。
「どーいうことだ！コラ！ワケを言えデク！」
爆豪が緑谷に突っ込んでいく。しかしそれは相澤のマフラーみたいなやつに止められた。
「炭素繊維に特殊合金の鋼線を編み込んだ『捕縛武器』だ、・・たく、何度も〝個性〟を使わすなよ。俺はドライアイなんだ！」
（（（（〝個性〟すごいのにもったいない！））））
私を含む全員の考えが一致した気がする。
「時間がもったいない、次準備しろ。」
そして麗日は緑谷に大丈夫か聞いた。私も動こうとした。しかし爆豪が立ち止まっていることに気付いた。

「どうしたの爆豪、まぁ緑谷のことでしょ。」
　私は爆豪に話しかけた。
「・・・フレンダ、お前デクの〝個性〟に気付いてたか？」
　ビンゴ、やっぱりそのことを考えてたのか。
「いいや、〝個性〟については今ので初めて見た。あんたが驚いてるってことはあいつ、何も変化なかったわけね？」
「・・あいつはついこの前まで無個性の石っころだったはずだろ。」
「石っころって、何よそれ。まぁ無個性だったんじゃないの？〝個性〟が発現したらあんたには報告すると思うけど。」
「・・あいつ、俺たちを騙してたのか？」
「・・その可能性もあり得るけど、それに何のメリットがあんのよ。ついでに、騙してたとしても、幼稚園の時のアレが演技だったと思うの？少なくとも私が見た限りだと演技には見えなかったけど。もし本当にあれが演技だったら、あいつ演劇の才能があるってことじゃない。」
「・・・・」
　爆豪の顔がどんどん怖くなっていく。その顔はまるで麦野が私を殺した時の顔と似ていた。しかし、殺意ではなく嫉妬？それか自尊心を傷つけられたのかな？

まあ、後3種目。ガンバろーっと

＃７　戦闘訓練?何それ美味しいの?

全種目計測終了

「そんじゃ、パパッと結果発表に移りますか。」

そう言って相澤はよくわからんものを取り出した。反応は人それぞれだった。緊張している者、余裕を持っている者、退屈そうにしているものＥＴＣ。ちなみに私はめんどくさそうにしている者に当てはまる。ちなみに爆豪はさっきの緑屋のことで若干ショックを受けているように感じる。そしてその緑谷は、すごい緊張しているように見えた。

「あ、ちなみに除籍は嘘だから。」

・・・は（・Д・）?!

「君らの最大限!を引き出す合理的虚偽だ。」

「「「・・はぁ??!?」」」

みんなすごい驚いていた。緑谷の顔なんてムンクの叫びと完全一致していた。ワロタ

?「あんなの嘘に決まってるじゃない、少し考えればわかりますわ。」

隣に立っている黒上ポニーテールの女子が言った。
「いや、それはないでしょ。」
私は彼女にそう言った。
？「なぜ？普通入学初日に除籍なんてあり得ませんわ。」
確かに普通ならそうだろう。しかしこの学校は普通じゃない。
「確かに普通だったらあり得ないけどね。でも、おそらくあの先生今まだ何人もの生徒を除籍しているはずよ。」
？「！、なぜわかるのですか？」
「簡単よ、そもそも除籍なんて言葉普通出てこないわよ。でも先生にとって『除籍』と言う言葉は日常茶飯事に使ってる。だから『除籍』なんて言葉が簡単に出てきた訳。結局、何回も生徒を除籍してないとあんな真面目な顔をしながら『除籍』なんて言わないって訳よ。」
隣にいる彼女を息を呑んだ。ちなみに私が除籍が嘘じゃないと分かったのは学園都市にいた頃に鍛えたものだ。そういう裏の仕事をしていたら、息を吐くように嘘をつか奴はたくさんいる。その嘘に騙されないように相手が嘘をついてるかどうかを簡単に見極められるように勉強した。そして勉強していくうちに私は仕事中、相手にハッタリをかましても簡単に信じられるぐらいになった。（事実、あの超電磁砲も騙せたしね。）

？「・・・では、なぜ相澤先生は『合理的虚偽』なんて言ったんですか?最初から最下位を除籍するつもりだったらあんなこと言いませんわ。」
「そうね、元々最下位は除籍だった訳よ。そして今回の最下位は緑谷。先生は緑谷を除籍する気満々だった訳。でも先生は緑谷を除籍にしなかった。つまりそれなりに見込みはあったって訳よ。」
彼女は納得したような顔をしていた。
「ありがとうございます。私、八百万百と申します。」
「あぁ、私は軍師輪。よろしく。」
八「よろしくお願いいたしますわ。」
そうやって私たちの波乱万丈のじんｓ、ゲフンゲフン
～～～～～仕切り直し～～～～～
そうやって私たちの波乱万丈の個性把握テストは終わった。
ちなみに私は２１位中１３位だった。
ーーーーー
下校時間
私は帰りの支度をして、教室を出た。昇降口から出たら爆豪が一人で歩いてた。だから私は彼に近づいた。

「バクゴー。」
そう呼んだら、彼は不機嫌そうな顔で私の方を向いた。
「一緒に帰ろー。」
そう言ったら彼は何も言わずに先に進んだ。
「ノーリアクションは傷つく！」
そう叫んだら
爆「勝手にしろ。」
そう言った。
「まだ緑谷について気にしてんの？」
彼の方が少しだけはねた。
爆「あいつは昨日までただの石っころだったはずだ。」
こいつ、まだ気にしてんの？どんだけショックだったのよ。
「さっきも言ったけど結局、私は何も知らない訳よ。少なくとも今日のあれで緑谷は〇個性〇を持ってることがわかった。そしてその〇個性〇がいつ発現したかわからないけど、少なくとも2、3年以上前ってことはないでしょ。だってそれだったらあんたに言うはずだし。」
さっきと同じことを言ったら爆豪は表現しにくい顔をしていた。

そして私たちの前方で、緑谷は楽しそうに飯田と麗日と喋っていた。その光景を見て微笑ましく思う反面、少し寂しさも感じた。

ネクスト　デイ　アット　スクール
午前中は必修科目・英語などの普通の授業。
マ「んじゃ、次の英文で間違っている奴はどれだ。」
・・・シーン
「おら、エヴィバディヘンズアップ!!盛り上がれ!!」
(普通だ。)
(普通だな。)
(普通ね。)
(クソつまんな、)
(関係代名詞が違うから４番!)
「・・・じゃあ次の問題・・」
(((先生寂しそう。なんか悪いことしたな。)))
「この英文を訳せ!!軍師!!!
!!」
いきなり名前を呼ばれたことに驚いて咄嗟に答えた。

「Ｈｕｎ　ｂａｇ　Ｐ・　ｓｔａｓｊｏｎｅｎ　ｇｌｅｍｔｅ」（訳：彼女はカバンを駅に忘れてきました。）
「「何語だよ!!!」」
「何語って、ノルウェー語だけど・・。」
「なんで英語の授業中にノルウェー語を使うんだよ!!」
「・・・咄嗟に？」
「おい!!」
「だって何語か指定されてなかったんだもん！」
「だもんじゃねぇ！」
　解せぬ
ーーーーーー
　アット　ランチタイム
　ここの食堂の料理マジでうまい！サバカレー、最高!!佐天が作ったサバカレーも美味しかったけど結局、どっちのカレーもうまいって訳よ!!
「白米に落ち着くよね!!最終的に!!!」
（最終的に落ち着くのは白米ぃ!?!?違うわ！サバ缶だわ!!!）
　私は心の中でそう反論した。

ーーーーーーー

アット　午後

「ワーターシーガー、普通にドアから入ってきた!!!!!」

うるっさ!!!!何これ!超うるさいんだけど!

「オールマイトだ!すげーほんとに教師やってるんだ!」

「銀時代のコスチュームだ!!画風が違いすぎて鳥肌が・・」

などなど色々なコメントが呟かれた。確かに画風が違いすぎるし、Ｌｅｖｅｌ５のオーラとも違う。さすが平和の象徴って訳よ。

「ヒーロー基礎学!ヒーローの素地を作るため、様々な訓練を行う科目!!」

結構本格的なのね。ここまで本格的だとなんでか学園都市を思い出す。

「早速だが今日はこれ!!戦闘訓練!!!!」

そう言ってオールマイトは『ＢＡＴＴＬＥ』と書かれたカードを取り出した。

「戦闘・・」

「・・訓練」

何人かが息を飲んでる。爆豪なんてすごい悪い顔してるし。あれだと緑谷が対戦相手になったらボコボコにするでしょうね。・・・南無

「そしてそいつに伴ってこちら!」

オールマイトはスイッチを押した。そしたら壁から番号が書かれているロッカーみたいなの
が出てきた。
「入学前に送ってもらった『個性届』と『要望』に沿ってあつらえた。戦闘服!」
「「おおおぉお!!」」
「着替えたら順次グラウンドβに集まるんだ!!」
「はーーい!!」
ーーーーーー
アット　更衣室
「八百万、あんたの戦闘服すごいわね。」
八「そうでしょうか？私の⊠個性⊠は素肌から発動しますのでなるべく肌を出しといたほうがいいんですの。」
「そんなもんか？」
八「そんなものです。」
？「輪ちゃんの戦闘服はほぼ私服ね。」
私の戦闘服は学園都市にいたときによくきていた服装だ。白いワイシャツの上に黒いブレザーを着て、襟のところに赤いリボンを結ぶ。そして赤いスカートの下に黒タイ

ツ。頭には黒いベレー帽。
「あー私の⊠個性⊠にこれといって条件みたいなものはないようなものだからね。慣れている服の方が動きやすいからね。結局、戦闘服っぽいところを上げるなら耐熱性とかそこらへんがついてるって訳よ。そういえば名前は?」
「蛙吹梅雨よ、梅雨ちゃんと呼んで。」
梅雨ちゃんが自己紹介をしたら他の子たちも自己紹介を始めた。
「あたし、芦戸三奈!」
「うん、よろしく。」
そして何もないところから声がした。
「私葉隠透!」
「・・・あんたの⊠個性⊠、光学操作?」
葉「違うよ、透明人間だよ。」
・・・痴女
葉「痴女じゃない!」
おっと声に出てたようだ。反省反省
「あたし、耳郎響香」
「・・ロックね。」

そこで全員着替え終わり、グラウンドへ向かう。

「麗日、あんたのスーツ、パツパツね」

麗「あまり要望書いてなかったからね。そういえば輪ちゃん、爆豪くんと知り合い？」

「えぇ、幼なじみよ。」

麗「おぉお！幼なじみ！・・じゃあデクくんとも幼なじみ？」

「そうだけど向こうが覚えてなかったから地味にショックって訳よ。」

麗「ｏｈ．」

会話を続けていたら２１人全員がグラウンドに到着した。麗日は緑谷とさっき私と話していた内容を話していた。

オ「みんないいじゃないか！かっこいいぜ!!」

緑谷、あいつオールマイトリスペクトしすぎでしょ。他の人はウサギに見えるだろうけどあの耳みたいなやつはオールマイトの髪だろうね。

あ、オールマイトも笑ってる。

閑話休題

飯「先生！ここは入試の演習場ですがまた市街地演習を行うのでしょうか？」

((あ、あれ飯田だったんだ。))

・・誰かと同じこと考えた気がする。

オ「よっしそれじゃあ２対２の戦闘訓練を始めよう!!」
梅「基礎訓練なしに?」
オ「その基礎を作るための実践だ!!ただし、今回はぶっ壊せばＯＫのロボットじゃないってところがミソだ!」
オールマイトに夜簡単な説明が終わって、質問の嵐がやってきた。
「勝敗のシステムはどうなりますか?」
「ぶっ飛ばしてもいいんスか?」
「相澤先生のように除籍とかあるんですか?」
「分れるとはどのような分かれ方をするんですか?」
「このマントやばくない?」
「お腹すいたんで鯖缶食べていいですか?」
((おい、今へんな質問聞こえたぞ))
オ「ンンンー聖徳太子ー!」
オールマイトがそう叫んでカンペを取り出した。
「いいかい?状況設定は敵がアジトのどこかに核兵器を隠していてヒーローはそれを処理しようとしている。」
初っ端から核兵器って物騒すぎない?!

「ヒーローは時間内に敵を捕まえるか核兵器を回収すること。敵は制限時間内までに核兵器を守るかヒーローを捕まえること。」

(((設定アメリカンだな!!)))

そこで私は一つちょっとした疑問が生まれた。

「オールマイト、質問いいですか?」

「お、軍師少女!いいぞ!」

「この戦闘訓練の大前提となる核兵器はハリボテですか?それとも中に煙でも入ってますか?」

「ハリボテだ!」

ｏｈ、そうなんだ。

オ「コンビおよび対戦相手はくじで決める!!」

ん?１チーム２人でしょ。うちのクラス２１人だから

飯「先生!我々のクラスは２１人です!１人はどうするんですか!?」

オ「え、そうだっけ?!」

おい、気づいてなかったのかよ。ポンコツだなぁこの教師。そしたらオールマイトは膝から崩れ落ちた。

「軍師ちゃん、ポンコツは酷いんじゃない?」

ｏｈ、声に出てたか、反省反省。
オ「で、では余った１人はＫのボールで、好きな相手と組んで、好きなチームと戦ってもらおう！」
閑話休題
結果、私がＫだった。
尾「どんまい、軍師さん。」
「励まさないで、もっと悲しくなる。」
オ「ま、まぁまぁ軍師少女、今回は運が悪かったってことで。」
オールマイトめ、見てろよ、私の出番がきたらあのハリボテを本物と入れ替えてやるからな。
爆「フレンダ、どーせくだらねぇこと考えてるだろうがやめとけ。」
「あんたにだけは言われたくない。」
オ「続いて最初に戦うのはヒーローチームとしてＡ。ヴィランチームとしてＤだ！」
そう言われて緑谷と爆豪がお互いのことを見た。爆豪からちょっとした殺意を感じたことをここに記しておこう。
「爆豪、やりすぎないようにね。」
爆豪にそう言ったがあいつはなんの反応も示さなかった。

～閑話休題～

「今回閑話休題多くない？」

しょうがないでしょ

「何が。」

・・・なんとなく

「おい！」

～閑話休題～

結果だけ言おう、緑谷は爆豪のチームには勝てたが、右腕がボロボロになった。あいつ無茶しすぎでしょ・・にしても、

「爆豪、大丈夫？」

こいつすごいショック受けてる。９年間ぶりに会ってなんとなく分かったけどこいつは自尊心の塊になってる。そして緑谷を下に見ていたせいで今回緑谷に作戦負けしたことが結構ショックだったのね。

オ「よし、講評の時間だ、っつても今回のベストは飯田少年だがな。」

飯「なな!!」

なな？何その驚き方。初めて聞いたわ。

梅「勝ったお茶子ちゃんや緑谷ちゃんじゃないの？」

確かにそう思うかもしれない。けど今回は

オ「なぜだろーなー。分かる人?!」

八「はい、オールマイト先生！」

そう言って八百万が手をあげた。

「それは飯田さんが一番状況設定に順応していたからです。爆豪さんの行動は戦闘を見た限り、私怨丸出しの独断。そして先ほど先生が仰っていた通り、屋内での大規模戦闘は愚策。緑谷さんも同様、受けたダメージから鑑みてもあの作戦は無謀としか言いようがありませんわ。麗日さんは中盤の気の緩み。そして最後の攻撃が乱暴すぎたこと。ハリボテを核として扱っていたらあんな危険な行為は出来ませんわ。相手への対策をこなし、核の争奪をきちんと想定していたからこそ飯田さんは最後対応に遅れた。ヒーローチームの勝ちは訓練だという甘えから生じた反則のようなものですわ。」

八百万すごいな。私と同じこと考えてる。そしてオールマイトは

（思ったより言われた。）

なんて考えてるでしょうね。

「ま、まぁ飯田少年もまだ固すぎる節はあったりするのわけだが・・・。正解だよ。くぅ～。」

「常に下学上達！一意専心に励まねばトップヒーローになどなれませんので。」

微妙な空気になった。

「確かに麗日はヴィランがいるところではきちんと緊張感を持ってた方がいいよね。でも、麗日のその性格はヒーローになってから人を救助する際、その性格のおかげで落ち着くことができる人もいるんじゃない？」

そう言ったらみんなが私の方を向いた。

「爆豪だって、結局、私怨丸出しだったけど、戦ってる時に相手の対処方法を即興で思いついて実行に移せたことが良かったと思う訳よ。そのおかげで追い詰めるところまで追い詰めることができたじゃない。」

爆豪は驚いた表情をした。

「緑谷も、自分の腕を使うのは最後の最後まで温存していて『ここだ！』って思うときに使うことが良かったんじゃない？まぁ、きちんと使いこなせるようになるのが一番だけど。」

言いたいことを言い終わって、オールマイトは少し満足そうにしていた。

「ナイスフォローだ軍師少女!!さぁ！次へ行こう！」

ーーーーーー

私の出番は最後だった。まぁ、自分の番が来るまで他のクラスメイトたちの能力を把握することができた。例えば、轟は『半冷半燃』（アブノーマルウェザー）、常闇の『影

牢鳥影』（ダークシャドウ）、口田の『動物感応』（アニマルボイス）、障子の『器官複製』（ボディプロデューサー）などなど。でも一番驚いたのは八百万の能力だ。彼女の能力は『創造』自分の肉体から物質（物体）を生み出す能力。学園都市風に言うなら『現存物質』（アルケミスト）かしら。おそらくＡ組２１人の中で唯一Ｌｅｖｅｌ５に辿り着けるかもしれない。何より一番驚いたこと

（あいつ・・翼が生えてない・・だと・・！）

Ｌｅｖｅｌ５　第２位　『未元物質』（ダークマター）　垣根帝督は似合わないメルヘンチックな純白の翼が生えてたのに。てっきり第２位とは真反対だから真っ黒い悪魔の翼が生えてくると思ったのに・・・

オ「最後に軍師少女の出番だ！」

おっと、考えているうちに出番が来たみたいだ。

ーーーーーー

オ「さて、軍師少女！誰と組む！」

私はクラスメイトの顔を見回した。・・正直言ってこの中に私と組めそうな奴がいない。それなら、

「私１人でやります。」

オ「・・・え?」

「「「「えぇぇぇ!!!」」」」
そんなに驚くか？
オ「ち、ちなみになぜかね？」

それを聞くか
「私の☒個性☒と組み合わせがいい☒個性☒がありませんから。」
オ「な、なるほどー。」（確かにそうなのかもしれないが、1対2で大丈夫なのか?!）
「あ、ただ相手チームも1人でお願いします。1対2は不公平ですから。」
オ「な、なるほど。了解した。では誰と戦う？」
私はまたクラスメイトの顔を見回した。1人、私の因縁の相手に似ている人物にしよう。
「上鳴くんでお願いします。」
上「え！俺?!なんで?!」
オ「そうか、ちなみになぜだい？」
「八つ当たりです。」
（（何についての八つ当たり?!））
（以前、超電磁砲と戦ったときに負けたからその八つ当たりね。）

私は頭の中で彼らの疑問を答えた。

＃８　八つ当たりと書いてリベンジと読む

サイド　上鳴電気

俺は今、入り口に立っていた。本来ならもう戦闘は始まっている時間だが、軍師はフ「５分じゃ準備する時間が少ないので１０分ください。」

と言って現在８分たった。あいつの⊠個性⊠は昨日の個性把握テストであまり見ていなかったが、爆弾や、ミサイルを取り出していたと思う。そこから爆弾を使う戦いだと思う。しかし、戦いにおいて使う爆弾は手榴弾や、地雷しか思いつかない。だからそれらの設置に時間がかかると思ってる。

（でも俺１人で勝てるのか？・・・いや、相手も１人だけど。）

という疑問があった。おそらく１人で戦うということはそれなりに実力があるということだと思う。・・っていうか

（なんであいつ俺を選んだの？）

１番の疑問はそれだった。本人は八つ当たりと言っていた。（何の八つ当たりかは知らんが。）そんなこんなで考えてると、

『それじゃあ屋内対人戦闘訓練開始!!!』

オールマイトの開始の合図が聞こえた。
「まぁ、深く考えてもしょうがない！いっちょやっちゃいますか!!」
俺は建物の中に入っていった。
▪入り口には特に変わった様子はなかった。歩き進めると左右に分かれている曲がり角があった。そしてその曲がり角の中央に人形が置いてあった。
（なんだこの人形、趣味悪いな。）
と考えていて、何気なく足元を見ると何かテープのようなものを踏んでいた。
（なんだこれ？）
と思ったら横から何か燃える音がした。音のした方向を見るとテープに火がついていて自分の足元に進んでいた。
（なんだ、こんなしょぼい攻撃か。なんかがっかりだわ。）
そう思いながらテープから足をどけた。そして気づいた。そのテープの進行方向に人形が置いてあったことに。しかし遅かった。次の瞬間、ぬいぐるみが爆発した。死ぬような爆発じゃなかったし、ただの煙爆弾だった。しかし、その煙をたくさん吸い込んだことで軽くむせた。
「ゲホッゲホ！んだよこれ!!」
ーーーーーー

アット　モニター室

切「おい、人形が爆発したぞ!!」

【ゲホッゲホ!んだよこれ!!】

オ「!!上鳴少年大丈夫か??!!」

【大丈夫です、ただの煙ですから。】

それを聞いてオールマイトは少し安心した。命に別状がないなら大丈夫か?と思った矢先、

上鳴の近くでまた爆発が起きた。

【チッ、またかよ!!】

上鳴は悪態をついた。

ーーーーーー

バックトゥー　上鳴

▪2回目の爆発が起きて周りを見渡すと大量の人形やぬいぐるみが置いてあった。そしてどれも⊠テープのようなもの⊠の上に置かれていた。そして次々とテープに火がついて行った。そして次々と爆発が起きた。

▪その場にある爆弾が全て爆発し終わって俺は考えた。

(この煙、あの人形が爆発したときに出てきているのは間違いない!そしてあの⊠テープ

のようなもの⊠が火種になってる！なんだよあのテープ！）

と考えながら⊠テープのようなもの⊠を見るとすべてのテープは一つの方向に反対側の端が右側にあるもう一つの曲がり角に続いていることに気づいた。

（テープに直接火をつけてるならその方向にいるはず！）

そう思いながらその方向に進み、曲がり角を曲がると、また爆発が起きた。

「またかよ!!何個あんだよ!!」

若干キレ気味である。しかし案の定、曲がった先に対戦相手の姿があった。

彼女はそう言って手に持っていた⊠何か⊠の先端を足元のテープに投げつけた。そしてテープに火がつき、進行方向においてあった人形に着火し、爆発した。

フ「ニシシシw、こっこまでおいでー。」

（うっぜーーーーー!!!!）

これが俺の素直な気持ちだった。

ーーーーーー

バックトゥー　モニター室

サイド　オールマイト

▪モニター室で私の口は塞がらなかった。爆弾を大量に使って上鳴少年を翻弄する軍師少女。入試のビデオでは⊠個性⊠の扱いに少し慣れているなーとしか思っていなかっ

たが、ここまで彼女が⊠個性⊠を使い慣れていることに驚いた。飯田少年や、爆豪少年など、日常的に使っても特に問題に発展しない⊠個性⊠ならともかく、彼女の⊠個性⊠は日常的に使うにはかなりの問題が発生する。だから彼女は⊠個性⊠の扱いにあまり慣れていない、そう思っていた。しかし蓋を開けてみればどうだろう、彼女は⊠個性⊠の扱いがとても上手だった。しかも爆発させるのにほとんど躊躇がないようにも感じた。まるで彼女は戦場に行ってたくさんの人を殺したかのように爆弾の扱いがうまかった。

（何が彼女をあそこまで強くしているんだ？）

と思った。そして同時に

（もしあれが本物の爆弾で、彼女が敵だったら彼女はたくさんの被害を出していたかもしれないが・・それは考えすぎか。）

切「軍師って、容赦ないなー」

瀬「それな、さっきっから上鳴やられっぱなしだもん。」

八「でも、軍師さんは追い詰められていますわ。」

轟「確かに、あいつはさっきから設置している爆弾を起爆しているだけで上鳴に全く攻撃できていない。まぁ、上鳴の⊠個性⊠は近距離専門みたいなところがあるから近づいたら感電するって考えているならしょうがない子もしれないが、軍師のやつ気付いてるのか？」

芦「何を？」

轟「あいつ、じわじわと上の階に追い詰められていることを。」

▪そそれを聞いてモニターを見ると、確かに上鳴少年が軍師少女を４階まで追い詰めていることに気づいた。上鳴少年はかなり体力を消耗している様子だったが、軍師少女は全く疲れている様子はなかった。ちなみに２人の間の距離はぱっと見８．９ｍぐらいだった。そして上鳴少年が軍師少女を追い詰めていて、有利に見えた。そしたら

上【おい、軍師、ここ４階だろ。お前結構やばいんじゃねーの？】

フ【そうね、確かにやばいわ。】

上【だろ、お前さっきから爆弾を爆発させてるだけだもんな。】

上鳴少年は交渉をしようとしているのだろうか？それもありだが、この状況での交渉は現場では結構危険だぞ。まぁ、今回はあくまで訓練だから多分大丈夫だろうが。

フ【そうね、確かにこのままだと私は負けるわ。このままだったらね。】

上【？どういうことだ？】

フ【そうね、結局あんたは気付いてないみたいだから教えてあげる訳よ。あたしがさっきから爆発させてる人形、あの中にちょっと水素を入れてる訳よ。】

「「「【「「「「は？」」」】」」】」」

フ【結局、量によっては大爆発が起きちゃうから少量だけだけど。でも知ってるわよ

ね？水素と酸素が混ざると水ができること。水素が入ってる容器に火を入れると爆発が起きて、水ができる。】

上【？あ、あぁ（そうなんだ）】

フ【じゃあ聞くけど、今、この階の湿度はどれくらいだと思う？】

彼女はそう言ってスカートから何か粉末が入ってる瓶を取り出し、彼女はその瓶を自分と上鳴少年の真ん中ぐらいの壁に叩きつけるように投げた。そして瓶が割れた瞬間爆発？が起きた。

「え?!」

「な、なんだ今の!!」

モニターを見るかぎり、先程の瓶の中身が爆発？したようだった。

上【な、なんだよ今の!!】

フ【硫化鉄ってね水や、湿った空気に触れると自然発火する訳よ。まぁ発火だから別に爆発とは言えないかもだけどね。まぁ、置いといて。このガス、わかるかしら？】

画面をよく見ると少し曇って見えた。いや、ガスが空間に充満していた。

上【え、いつの間に！】

フ【これは私が作った気体爆薬『イグニス』。これは放出後、一瞬で拡散して空間を満たす。】

それを聞いた時、私の背筋が凍った。気体爆薬、まさか？

上【えっと、つまりどういうことだ？】

フ【要するにこの空間はでっかい爆弾ってわけよ。】

「「「「「「「「!!」」」」」」」」

フ【まぁ、この量だとあまり爆発はしないけどね。でも水素が充満している部屋で火をつけちゃあいけないように、爆発して欲しくなかったら電気を出さないことねッ!!】

そしたら軍師少女が上鳴少年の腹に蹴りを入れた。

ーーーーーー

バックトゥー　上鳴

「グフゥ!!」

腹に痛みが走った。と思ったら目の前に拳があった。俺はとっさに両腕を顔の前でクロスさせ、なんとか拳を防いだ。⊠個性⊠を使おうとしたが、さっき言ったことが本当なら放電した瞬間この部屋が爆発するかもしれない。

(こいつ、まさか俺の⊠個性⊠を封じるためにこの部屋に、、なんだっけ、『イグぬし』か『かぶニス』だったかばらまいたのか?こいつ・・・頭いい!!)

そのあと、俺は軍師の攻撃が当たらないように避けまくった。

ーーーーーー

アゲイン　モニター室
サイド　オールマイト
画面には2人の（フレンダの一方的だが）肉弾戦が繰り広げていた。軍師少女の拳を上鳴少年が防いだと思ったら、彼の脇腹に蹴りが入り、怯んだところに軍師少女がまた拳を入れようとする。
（軍師少女、さっきの『イグニス』だったかな？あれを使えば上鳴少年の⊠個性⊠を封じることができるが、それは軍師少女も同じこと。しかし⊠個性⊠が封じられていてもそれなりに戦えている。何か格闘技でもやっていたのか？）
私はそう考えていた。
轟「軍師のやつ、⊠個性⊠なしでも結構戦えてるな。」
梅「そうね。上鳴ちゃんの⊠個性⊠を受けないには向こうが⊠個性⊠を使わないようにするのが一番。それだったら敵側としてはあのガスをばら撒くことは良い選択なのかしら？」
そんな会話が背後から聞こえてきた。
麗「オールマイト先生、止めなくて大丈夫なんですか？」
切「止めたほうがいいですよ。だってあの空間が爆弾ってことは一歩間違えればあの2人大怪我しますよ。」

確かに止めたほうがいいかもしれない。しかし画面に写っている２人は、特に上鳴少年は頑張って戦っている。そんな２人を強制終了させるのはかわいそうだ。

（・・・どうするべきか。）

そう考えたら八百万少女が言った。

八「大丈夫だと思いますよ。」

「なぜだい？」

八「それは口止めされているので言えませんが。まぁ、もう直ぐ時間切れですよ。」

ーーーーーー

アゲインバックトゥー　上鳴

結構ダメージ入ってきつい。なんとか攻撃は３回に１回躱せているが３回に２回は受けているからきつい。

フ「結局、終わりって訳よ。」

軍師が急にそう言った。

（どういうことだ？）

と思ったら。

『タイムアップ!!!』

と聞こえた。

「まじか。」

フ「まじよ。ごめんね、授業なのに殴ったり蹴ったりしちゃって。」

彼女はそう謝罪してきた。

ーーーーーーー

モニター室に到着

サイド　フレンダ

オ「講評の時間だ！今回のベストは軍師少女だ！わかる人！」

八「はい、オールマイト先生。それは軍師さんが状況に応じてあらゆる方法で上鳴さんを翻弄させていたからです。まずビルに仕掛けたたくさんの罠、上鳴さんの行動を予測しておいたものだと思われるからです。そしてお互い個性を封じられたとき、個性なしでもきちんと対応できていたからですわ。」

結構言われたな。

オ「ぐぬぬ・・正解だよ。しかし軍師少女、先ほどの気体爆薬、『イグニス』だったかな？あれはダメだ。本物の敵、それか実戦だったらともかく訓練に使っちゃうのはダメだよ。あれはかなり危険なものだからな。もうあれはつかちゃダメだよ。」

え？

「先生、あれただの窒素ガスですよ。」

「「「「「え？」」」」」

八百万はため息をついていた。あれ、これわて

「「「「「・・・えええええええええええ!!!!!」」」」」

あ、八百万以外は騙されていたか。

「訓練が始まる前に八百万に作ってもらったんですよ。ていうかあんなの嘘だってわかると思ってたんだけど。」

オ「いや、君の顔がまじだったから・・・ねぇ？」

＃９　お笑い芸人にとって一番きついのは終始観客が誰１人笑わないことだよね。

サイド　フレンダ

「お疲れさん！初めての訓練にしちゃあみんな上出来だったぜ！」

全ての対戦が終了して、オールマイトがその場にいた２０人に告げる。

「それじゃあ私は緑谷少年に講評を聞かせねば！着替えて教室にお戻り！」

そう言って彼は素早く去っていった。

（あんなに急ぐ必要ってあるの？）

・私はその疑問ができた。しかし周りはオールマイトの素早い移動に感心していて誰も私と同じ疑問を持った奴はいなかった。

（私も緑谷の様子でも見に行きますかね。）

そう考え私も保健室へ向かう。

――――閑話休題――――

・コスチュームから制服に着替え、私は保健室の前までやってきた。そして扉をノック

しようとしたが、中で話し声が聞こえた。普通の人だったら空気を読んで盗み聞きとかしないで、立ち去るだろう。しかーし！私、フレンダ・セイヴェルンはそんな空気を読むような行動はしない！私は勢いよく扉を開けた。そのせいで中で話し合っていた２人は驚く。片方はリカバリーガールで、もう片方はガリガリに痩せ細ったオールマイトだった。

（・・・?!え?!ちょ、おま、どゆこと?!なんでオールマイトがガリガリになってんの??!!）

【あなたはパニック状態に陥ったさてどうする?】

▶?叫ぶ

▶?泣く

↓▷スルー

▶?逃げる

フレンダハスルーヲセンタクシタ

「オールマイト先生、緑谷の様子はどうですか?」

「あ、さっきから起きる様子はないからしばらく眠っているだろう！」

「そうですか、緑谷の顔を見ていいですか?」

「いいんじゃないか?」

その回答を聞いて、私は緑谷にちかずｋ

「いやいやいや、ちょっと待って。」
　オールマイトが私の肩をつかんできた。
「・・・なんですか?」
「え、ちょ、君何にも思わないの?!私の姿に?!」
「結局、空気を読んでスルーしようかなーと思ったわけよ。ダメでしたか?」
「いや、ダメではないよ!でも普通だったら気になるんじゃないの?!」
　ウルセェなこいつ。そう思っていたらリカバリーガールが口を挟む。
「オールマイト!あんたそれじゃあ自分がオールマイトだって明かしているようなものじゃないか!」
「Ｓｈｉｔ!!そうだった!」
▪私はこの状況をきちんと頭の中で整理していた。そして整理し終わって、答え合わせをする。
「結局、今の姿が本来の姿で、マッチョな姿が⊠個性⊠を使用してる姿ってわけね。元からそういう体質なのか、それとも以前なんかの事件でそういう体になっちゃったのかはわからないわけよ。」
「・・・!ま、まさかそこまでわかるとは・・・驚いた。普通の人だったらこの姿を見て私だと認識しないのに。」

いや、これくらい爆豪だったら簡単に想像できると思うけど。
「仕方がない、誰にも話すなよ。」
▪そう言ってオールマイトはコスチュームの上着の部分をめくる。そこには蜘蛛の巣のように手術あとがあった。オールマイト曰く、６年前、とある敵にこの傷をつけられたらしい。そのせいで、呼吸器半壊、胃袋全摘しないといけなくなった。そしてそのせいで、１日３時間しか活動できなくなったらしい。これを聞いて思ったこと。学園都市の技術だったらそこら辺どうにかできるんじゃ・・・まぁ、今気にしちゃあダメか。
「なるほど、結局、それが理由でさっきあんなに急いでいたわけね。なるなる。」
「やけに理解するのが早いんだね。」
そりゃあねぇ、これぐらい早く理解できてなかったら暗部でやっていけないもん。
「ちなみに緑谷はそれを知ってますよね。」
「・・!、な、なぜそう思うんだい?」
「結局、緑谷がいつ起きるかわからない状況で本来の姿に戻るということは緑谷がいつ起きても平気ということじゃないんですか?」
それを言ったらオールマイトはやっぱり驚いた顔をしていた。
「どうして緑谷が知ってるかは置いといて、とりあえずこのことは黙っとくってわけよ。あんたや緑谷のためにね。」

「それはたすk「その代わり」？」
「あんたと緑谷の関係を教えてもらうわよ。」
「・・!!」
「結局、緑谷に☒個性☒が発現したのにはあんたが関わっていることはなんとなくわかるわけよ。例を上げるとするなら、昨日の『個性把握テスト』。あんた、緑谷のことをずっと見てたからね。あれで感づかない方がおかしい・・・かもしれない。」
そう言ったらオールマイトは口を閉じ、そして言った
「・・師弟関係、だ。」
「・・・わかりました。」
（こりゃまだ何かあるな。）

サイド　緑谷出久
夢を見ていた。その夢で1人の女の子がいた。僕はその女の子のことを知っていた。その子は僕が☒無個性☒ってわかっても拒絶しなかった。きちんと最後まで友達でいてくれた。
『結局、個性がなくても命を投げ捨てる覚悟と人を助けたいって想いがあるなら立派なヒーローって訳よ。』

あの子が言った言葉だ。
そして、入試の日
『結局、覚えてないってわけよ。まぁ、９年ぶりだもんね。』
あの子は、あの子は
そこで僕の目が覚めた。目を開けたとき自分の顔を覗き込んでいる人物がいた。金髪で、制服と同じ色のベレー帽をかぶっている同じクラスの女子・・・あの子だ。
「フ、レン、、ダ?」
僕はあの子の名前を呟いた。そしたら彼女は驚いた顔をした。でもすぐに、笑顔に戻った。
「結局、思い出すのにあまり時間がかからなかったわけよ。」

#10　私はこの空気を知っている

サイド　フレンダ

戦闘訓練の翌日はめんどくさいことがあった。それはマスコミだった。

「オールマイトの授業はどうですか?!」

私はすこぶるめんどくさかった。どうやって逃げようか考えていたら爆豪の姿が見えた。そこで私はいいことを思いついた。

「あ、私急いでるのであちらにいるツンツン頭の子にインタビューしてくださーい。」

そう、Ｏ・ＳＨＩ・ＴＵ・ＫＥである。

「おい!俺を巻き込んでんじゃねぇ!!」

ごめん爆豪、後で私のサバ缶一つあげるから許して、と心の中で謝罪をしておく。

・・・・・・・・・・・・

ホームルームは相澤の話から始まった。

「昨日の戦闘訓練、お疲れ～。ＶＴＲと成績見させてもらった。爆豪、お前もうガキみてえな真似するな。能力あるんだから。」

「・・・分かってる。」
　それには半分同意。でも爆豪からガキみたいなところをとったらどうなるんだろう。
「で緑谷は、また腕ぶっ壊して一件落着か。個性の制御、いつまでも出来ないから仕方ないじゃ通させねえぞ。」
「・・・・・・っ!!」
　あれ?緑谷の⊠個性⊠って自分の脳にかかってるリミッターを解除する物なんじゃないの?
「俺は同じ事を言うのが嫌いだ。それさえクリアすればやれることは多い。焦れよ、緑谷。」
「・・・・はい!」
　おぉ、いい返事。でも怪我しないようになるのはもうちょっと先だと思うけど。
「それと軍師。」
　え?!私も!?
「お前はやりすぎだ。いくらハッタリだったからってあれは危険すぎる。もうちょっと気をつけるように。」
「・・・・はい。」
　結局、暗部にいた頃と同じようにしたらダメってわけね。反省反省。

「そんで、ＨＲの本題だ。急で悪いが今日は君らに・・・」
（（また臨時テスト!?））
（う～ん、また［個性把握テスト］と似たもの？）
「学級委員長を決めてもらう。」
「「学校っぽいのきたぁぁぁぁッッッ!!!!!!」」
うるせぇなこいつら。確かにここ2日間学校らしいことといえば授業だけだけど、結局、学級委員長を決めるだけで普通、こんなに喜ばないってわけよ。しかもみんなやる気１００％だし。結局、めんどくさいからやりたくないってわけ。
「委員長!!やりたいですソレ俺!!」
「ウチもやりたいス。」
「オイラのマニフェストは女子全員膝上３センチ!!」
「僕のためにあるやつ!!」
「リーダー!!やるやる!!」
っと考えていたら周りの生徒全員手をあげていた。やる気に満ち溢れてますねー。
「静粛にしたまえ!!」
ん？飯田？どうした？
『多』を牽引する責任重大な仕事だぞ・・！　『やりたい者』がやれるモノではないだろ

う!!周囲からの信頼あってこそ務まる聖務・・！　民主主義に則り、真のリーダーを皆で決めるというのなら・・これは投票で決めるべき議案!!」

おぉ、かっこいい。でもさぁ、

「「そびえ立ってんじゃねぇか!!なぜ発案した?!」」

おっと瀬呂と被った。

その後、結局投票になりました。結果を言うと緑谷に3票入り、八百万に2票入った。それで緑谷が委員長、八百万が副委員長になった。ちなみに、私は飯田に入れた。理由を挙げるならやっぱり人をはまとめられそうだから。あと眼鏡だから。でもあいつには私の1票しか入ってなかった。あいつ・・自分以外の奴に入れたのか・・。他の奴らの票数を見るかぎりやっぱり緑谷か八百万ね。一緒にいた期間がまだ短いからどっちに入れたかわからないけど・・多分緑谷に入れたわね。

「な・・!!誰かが俺に入れてくれたのか・・。ありがたかったが期待に答えられなくて申し訳ない・・。」

「それってつまりお前、自分以外の奴に票を入れたのかよ。」

そして選ばれた2人が前に出た。緑谷はやっぱり生まれたての子鹿にように緊張してるし、八百万は「悔しい・・」って呟いてたし。でもなぁ~やっぱり緑谷より飯田の方が適任ってわけよ。（↑あくまで個人の意見です）

ーーーーーーーーーーー

時は過ぎてお昼の時間

私はサバ餃子とサバ缶をプレートに乗せながら席を探していた。

（うーん、人が多いわねぇ。結局、ヒーロー科以外の科の生徒もいるからしょうがないってわけよ。）

と、考えながら首を回していたその時、

「輪ちゃーん!!」

私の名前が呼ばれた方向を見ると緑谷が私に手を振っていた。そして彼の隣の席は空いていた。私が座っても大丈夫そうだ。そして私は緑谷の隣の席に近づく。近づいて分かったが緑谷の向かい側に麗日と飯田が座っていた。まぁ、そんなこと気にせず席に座る。

「ありがとね緑谷。おかげで立ち食いしないで済んだわ。」

「む！軍師くん、いつの間に彼と仲良くなったんだ？」

「そっか、軍師さんデクくんの幼馴染だもんね。じゃあ思い出してもらったんだ。」

と、会話が始まる。そしたら緑谷が不安そうな顔で言ってきた。

「いざ学級委員長やるとなったら務まるか不安だよ。」

「ツトマル。」

「まぁ、なんとかなるんじゃない？」
「大丈夫さ。」
　満場一致・・・なのか？これ？
「緑谷君のここぞという時の胆力や判断力は他を牽引するのに値する。だから君に投票したのだ。」
「あ、やっぱりあんた緑谷に投票したのね。」
「でも飯田くんも委員長やりたかったんじゃないの？眼鏡だし。」
「そうよ、私、あんたに投票したのよ。眼鏡だから。」
（輪ちゃんと麗日さんって何気にざっくりいくよなー。）
「やりたいとふさわしいか否かは別の話。僕は僕の正しいと思う判断をしたまでだ。」
　おぉ、かっこいい。飯田って結構かっこいいこと言うんだよなぁー。こう言うかっこいいことを言うってのも私が票を入れた理由に入るんだよなー。・・にしてもなんか違和感が、
「『僕』？」
　あ、そういえばこいつ、さっきに一人称『僕』になってたわね。違和感の正体はこれか。やっぱりこいつって坊ちゃんなのね。麗日がそんなこと飯田に言ったら飯田はそう呼ばれることが嫌で一人称を変えていたと言った。

「あぁ、そうだ。俺の家は代々ヒーロー一家なんだ。俺はその次男だよ。ターボヒーロー『インゲニウム』は知ってるかい？」
「もちろん知ってるよ!!東京の事務所に６５人の相棒サイドキックを雇っている大人気ヒーローじゃないか!!　・・・まさか、」
「それが僕の兄さ!!」
　どうやら飯田はお兄さんに憧れてこの学校に入ったみたいだ。
「まぁ、誰かに憧れてヒーローになろうって思うのはわかるわけよ。私も父さんに憧れてヒーローになろうって思ったからね。」
「む？軍師くんのお父さんもヒーローなのか？」
「『元』がつくけどね。」
　その言葉に向かい側にいる２人は首を傾げる。緑谷は少し苦い顔をしている。
《セキリュティ３が突破されました生徒の皆さんは速やかに屋外へ避難してください》
　と、アナウンスが鳴った。周りは何事かとパニックになる。ってゆーかセキュリティってなに?!この学校そんなのあったの?!初耳なんだけど!?
「セキュリティ３なんですか?!」
「校舎内に誰かが侵入して来たってことだよ!!こんなの３年間で初めてだよ!!」
　そのあと、避難しようと考えている生徒が多いせいで廊下は缶詰状態。・・・なんか

サバ缶食べたくなってきたな。そんなことを考えているうちに窓際まで流されていた。イイテンキダナー、と、外を見ていたらマスコミが見えた。そしてマスコミの向こう側から『ナニカ』を感じとった。

（私はこの空気を知っている。）

この感覚は私が暗部にいた頃によく感じた『ナニカ』だった。その『ナニカ』を思い出そうと頭の中を整理していたが、

「あれは、マスコミ?!」

隣から知ってる声が聞こえた。見てみると飯田が窓に張り付いていて、麗日がその近く?にいた。そのことに少し安心した。私は飯田に声をかける。

「飯田くーん!!」

麗日が飯田に声をかける。飯田は何かに迷っているようだった。

「飯田!あんたこのパニックを止めるいい方法思いつかない?!」

とりあえず背中を押すような言葉をかける。

「（止める方法・・兄なら・・緑谷くんなら・・そうか!）麗日くん!俺を浮かしてくれ!!」

そう言って彼は麗日に手を伸ばす。麗日はその意図を理解したのか伸ばされた手の触れる。そして麗日の能力『重力消去』の影響で飯田が浮かぶ。飯田はズボンを膝まで

上げ、能力を発動させる。そのまま廊下の出口の非常口のランプの上に非常口の人のようなポーズでぶつかる。しかしそれだけでは視線が集まらない。そう思った私は被害が全く出ないであろう爆弾を取り出し、上空になげる。怪我人がでなさそうな高さに辿り着いたことを確認し、爆弾を起動させる。

〝パンッ!!〟

パーティー用クラッカーのような音が廊下に響く。その音に慌てている生徒は驚き、上を見上げる。それは、私にとって、飯田にとって好都合だった。

「大丈ー夫!!ただのマスコミです!!何もパニックになることはありません!!!」

その後、警察が到着し、マスコミは帰っていった。その後、授業はきちんと行われた。しかし、授業中、私はさっき感じた『ナニカ』を思い出そうとした。けれど思い出せなかった。とりあえず『フレンダ・セイヴェルン』の頃の記憶を整理する。出てきたのはやっぱり闇に浸かっていた頃の自分だった。そして『ナニカ』を思い出した。

（誰かが何かに向ける悪意。）

そして私は確信した。

（近日中に何かが起きる。）

＃１１　自分が恥ずかしいと思う癖は早めに直しておくほうが身のためだと思う。

昨晩、宣戦布告?のせいで全く眠れなかった。そのせいで他の授業は眠気と戦ったりしてきちんと聞いてなかった。

「今日の授業はなんでもござれ『人命救助訓練』だ。そして、今日の授業は俺とオールマイトともう1人の先生の3人大勢で見ることになった。」

先生がそう言って私の眠気が覚めた。そして、先生の言葉で、周りの反応は人それぞれだった。ノリノリの人、大変そうだなぁーという人などなど、いろいろな反応があった。でも私は昨日のことで不安になった。

(昨日のやつが宣戦布告ならいつ仕掛けてくるか?少なくとも昨日の今日はないはず。)

気づいたら周りの人はコスチュームを取っていた。そういえば今日の訓練でコスチュームを着るのは自己判断って言ってたっけ?

(体操着かコスチューム、体操着はそんなに好きじゃない。だったらコスチュームか。)

私はコスチュームを棚から取り出し更衣室へ向かう。

ーー閑話休題ーー

「クソッ!!こういうタイプだったか！」

飯田が悔しがってる、さっき「順番に奥から座ろうって」って感じのことを言ってたから高速バスみたいな形だと思ってたんでしょうね。どんまい。ちなみに私は爆豪の隣に座った。理由を挙げるなら落ち着くからだ。爆豪は少し麦野に似たところがあるからだろう。窓の外を眺めていたらまた眠気が戻ってきた。『眠るな』とは言われていないから私は眠ることにした。

ーーーーーーーーーーーーーー

サイド　爆豪

何が『クソを下水で煮込んだ性格』だ。俺はまじであいつぶち殺すかどうかを考えていた。その時、肩が物理的に重くなったのを感じた。見るとフレンダが俺の肩に寄りかかっていた。と思ったら腕を俺の体に巻きつけてきた。

「・・・・は?」

頭の中が一瞬真っ白になった。

(そういえばこいつ、寝るとき必ず何かに抱きつく癖があったな。懐かしい。)

と、昔を思い出した。思い出してみるとこいつは幼稚園の時のお昼寝の時間でよくデクや俺に抱きついていたのを思い出した。懐かしい思い出に浸っていると俺もだんだ

ん眠くなっていった。
（・・別に寝てもいいよな。）
俺は目を閉じた。
ーーーーーーーーーーーーーー
サイド　フレンダ
▪今さっき今回の授業を行う施設に到着した。にしてもさっきは驚いた。眠りから覚めると爆豪の寝顔がすぐ目の前にあって数秒間フリーズしてしまった。しかもその後、芦戸と葉隠に質問攻めされた。そのことで、恋バナとかは聞く分にはいいけど自分から話すのは苦手ということに気づいた。まぁ、私が困ってるところを見た緑谷が私の抱きつき癖のことを周りに話して納得してもらったが、私の恥ずかしい癖がみんなに知られて死にたくなった。
▪バスから降りると宇宙服に似たコスチュームを着ている人がドームみたいな建物の中にいた。
「すげーー！ＵＳＪかよ!?」
うん、確かにこりゃあＵＳＪだわ。・・そう言えば学園都市の第六学区にもアミューズメントパークがあったなぁ。フレメアと一緒に行ってみたかったなぁ。
「水難事故、土砂災害、火事、その他もろもろｅｔｃ。あらゆる事故や災害を想定し、僕

が作った演習場、その名も『ウソの災害事故ルーム』通称『ＵＳＪ』です!!!」
(((本当にＵＳＪだった!!!)))
　大丈夫か？この学校？いつか著作権なんちゃらかんちゃらで訴えられたりしない？すっごい心配なんだけど。
「スペースヒーロー『１３号』だ!!」
「私好きなの『１３号』!!!」
　テンション高めなお二人さん。まぁ、麗日の能力って見方を変えると『１３号』と同系統だもんね。そう考えていると教師２人は何やら深刻そう？な会話をしていた。そして１３号が左手が３の数字を表していた。そこから察するに３人目の教師であるオールマイトが通勤時に制限時間ギリギリまで活動しちゃっておそらく授業の最後ぐらいしか顔を出せなくなったってわけね。・・あの人って馬鹿なのかしら？っと教師２人の会話が終わって１３号はこちらを向く。
「えー始める前にお小言を一つ二つ・・三つ・・・・四つ」
(((増える・・)))
(結局、話すんだったら何を話すか決めてからにしてほしいってわけよ。)
　１３号の話た内容を要約すると
『〝個性〟は使い方を間違えると簡単に人を殺せちゃうからきちんと気をつけて扱って

ください』ってところね。
　確かに１３号の言う通りって訳よ。事実、私の〝個性〟は完全に暗殺向き。一歩間違えるどころか、その気になればここにいる全員を殺せる。まぁ、私はこの世界に転生した際に『暗部』にいたときの考え方を捨てるって決めたし。それにお父さんとの約束もあるからね。結局、そう簡単に〝個性〟を悪用するつもりはないって訳よ。
　そして相澤が授業に移ろうとしたとき、昨日感じた感覚を感じ取った。しかも今回ははっきりと。そしてその感覚がする方を見た。そこには黒い霧のようなものがあり、それが徐々に大きくなっていき、中から手のアクセサリーのようなものをたくさんつけている男を中心に、たくさんの人間が出てきた。
「一かたまりになって動くな!!」
　相澤が生徒（私達）に向かって叫ぶ。
「１３号!生徒を守れ!!あれは・・敵（ヴィラン）だ!!」

＃１２　良く考えてみれば『能力』より⊠個性⊠の方が種類が豊富な気がする

　黒い霧の中からぞろぞろとたくさんの人間が出てくる。
「は？敵!?馬鹿だろ！ヒーローの学校に入り込んでくるなんてアホすぎるぞ!?」
　周りがパニックに陥る。
「先生！侵入者用センサーは？」
「勿論ありますが・・・」
　八百万が若干パニックになりながら１３号に聞く
「センサーが反応しねぇなら向こうにそういうことが出来るヤツがいるってことだ。校舎と離れた隔離空間、そこにクラスが入る時間割、馬鹿だがアホじゃねぇ。これは何らかの目的があって用意周到に画策された奇襲だ。」
　轟は敵を見ながら冷静に分析する。それを聞いてフレンダはその『目的』を考える。
（奴らの目的ね・・・やっぱり考えられるとしたらオールマイトね。昨日のマスコミは今日のこの時間割を手に入れるためのカモフラージュかしら？いや、マスコミは『そこにあったから利用した』ってところかしら）

「１３号、避難開始。学校に電話試せ。センサーの対策も頭にある敵だ、電波系のヤツが妨害している可能性がある。上鳴！お前も個性で連絡試せ。」
「うっす。」
　やはりアングラといってもプロヒーロー。やはり冷静だ。
「先生は?!一人で戦うんですか!?あの数じゃいくら個性を消すと言っても・・・。イレイザーヘッドの戦闘スタイルは敵の個性を消してからの捕縛だ。正面戦闘は・・・」
「緑谷、人は時と場合によっては戦闘スタイルを変える必要があるのよ。」
「そういうことだ緑谷。一芸だけじゃヒーローは務まらん。１３号、生徒たちは任せたぞ！」
　そう言って相澤は敵に向かっていく。相澤を見た敵たちは余裕そうに相澤を潰そうとするが、相澤に⊠個性⊠を消され捕縛布に捕まり簡単に倒される。そしてその捕縛布を扱う相澤を見てフレンダは
（念動能力（テレキネシス）を使ってるかのように滑らかね。）
　と思っていた。そして彼女の隣に立っていた緑谷は
「すごい！多対一こそ先生の得意分野だったんだ!!」
　と分析するが「冷静に分析したり観戦している場合じゃない！」と飯田に怒られ、２人は出口に向かうが、黒い霧の敵が進行を邪魔する。そして簡単な紹介を始める。

「はじめまして。我々は敵（ヴィラン）連合。僭越ながらこの度ヒーローの巣窟、雄英高校に入らせていただいたのは平和の象徴オールマイトに息絶えていただきたいと思ってのことでして。」

（やっぱり狙いはオールマイトか。まぁ敵にとっては邪魔でしかないものね。）

フレンダはそう考えながらスカートから三角錐型の小型爆弾を取り出す、そこで爆豪と切島と目が合う。そこで三人はお互いの考えを理解する。

「本来ならばここにオールマイトがいらっしゃるはず。ですが何か変更があったのでしょうか？まあ、それとは関係なく私の役目はこｒ」

言い終わる前に爆豪と切島、そしてフレンダの爆弾が襲いかかる。

「その前に俺たちにやられることを考えなかったのか？」

と切島が霧の敵に言う。しかしノーダメージだったらしく特に効いてる様子がなかった。

「危ない三人とも!!下がりなさい。」

「危ない危ない。いくら生徒といえども金の卵。さっきも言いかけましたが私の役目はあなたたちを散らして、嬲って、殺す!!」

そう言って生徒たちは黒い霧に飲まれていった。

ーーーーーーーーーーーーーー

「こいつら、手応えないわね。」
「ああ、弱ぇな。」
　そう言って倒壊ゾーンに飛ばされた爆豪、切島とフレンダ（軍師）の三人は敵を倒し終える。
「っし！　早く皆を助けに行こうぜ！　俺らがここにいるって事はきっとＵＳＪ内にいるだろうし、攻撃手段が少ないアイツ等が心配だ。俺らが先走ったせいで、１３号先生が後手にまわった。先生があのモヤを吸っていれば、こんな事になっていなかったんだ。男としての責任が。」
「いや、責任も何も私たちが攻撃しなかったとしてもどっちにしろ飛ばされていたでしょうね。」
「そ、そうか。とりあえずみんなを助けにいこうぜ!!」
　切島が元気よく2人に声をかける。しかし、
「悪いけど行きたいなら1人で言ってくれない？」
「あぁ、行きたいなら1人で行け。俺たちはあのワープゲートをぶっ殺す!!」
　2人のその言葉に切島は驚く。
「はぁ?!爆豪はともかく軍師は何言ってんだよ!!」
「おい、『爆豪はともかく』ってどう言う意味だクソ髪!!」

しかし切島は爆豪の怒りを無視し話を続ける。
「この期に及んでそんなガキみてぇなことを言うなよ。それにあいつには物理攻撃きかねぇだろ。」
「うっせぇ。敵の出入り口を塞いどいた方がいざって時に逃げ出せねぇだろ！」
「でもモヤの対策もねぇのに。」
「いや、あるわよ。」
フレンダがそういうと切島は驚いた顔をする。反対に爆豪は笑みを浮かべる。
「お前気づいてたか。」
「そりゃあね。飛ばされる前あいつ『危ない危ない』って言ってたからね。あと弱点らしき場所がわかりやすい位置にあったし。」
「え?!そんなのあったのか?!」
三人がそう話していると背後に隠れていた生き残っていた敵が自分に背を向けていた爆豪とフレンダに襲いかかる。
「つーか」
「ってゆーか」
２人は同時に言って爆豪は左手を背後に、フレンダは右手でトスしていた小型爆弾を背後に投げ、それを２人は同時に爆破させる。

「生徒(おれら)に充てられたのがこんな三下なら。」
「大概大丈夫でしょ。」
（すげー反応速度）
　そしてフレンダは今自分と爆豪が爆破させた敵を見る。
（光学系能力か・・・。今のだと強能力者(レベル3)ぐらいかしら）
　そう考えていたら2人に爆破された敵が〝ピクリ〟と動く。それを見たフレンダはちょうどいいと思いその敵を壁に寄り掛からせ、スカートからテープを取り出しそのテープを敵の体に張り付ける。そしてその奇妙な行動を切島は不思議そうに、爆豪は納得したような顔で見ていた。そしてフレンダは一通りテープを貼り終えたのかテープをしまい、入れ替えるようにテープ専用のツールを取り出す。
「軍師、お前何やってんの?」
　切島はフレンダに質問する。
「敵の情報はいくら持ってても損はないでしょ。ハイ起きろー。」
　と言いながら敵の頬を叩く。そして眠っていた敵の目が開く。そして逃げ出そうとするがフレンダがツールを敵の顔に近づける。
「今からいくつか質問するから答えてね。まず一つ目、今回の首謀者は誰?」
　フレンダが敵に質問する。しかし敵は応えようとしない。そこでフレンダはさっき

のテープをまた取り出し、床に貼り付けて、床に付いたテープに持っているツールで火をつける。
「結局、あんたの身体中に貼られてるテープはこれと同じものってわけよ。もし私がこのツールをあんたの体に貼られているテープで火をつけられたら、あんた・・・粉々になるわよ。」
口は笑ってる。しかし目は笑っていない。今説明されたことと相手の顔を見たら恐怖しかない。敵は震えている。同じ仲間であるはずの2人も震えている。
「別に話さなくてもいいのよ。ただその場合、あんたが粉々になってから別のやつに聞くだけだし。」
「わ、わかった!!わかったから!!全部話すから!!」
敵は脅しを聞いて黙っていられず、大声で言う。
「今回の首謀者は?」
「手をたくさん貼り付けた『死柄木』ってやつ!!そいつがリーダーだ!!」
「目的は?」
「説明されただろ?!オールマイトの抹殺だ!!」
「じゃあそのための作戦は?」
「生徒全員をＵＳＪの中に散らばらせて俺らが殺すって作戦だ!!」

「じゃあ生徒全員ＵＳＪ（この中）にいるのね？」
「そうだ!!満遍なく散らばってるはずだ!!」
　それを聞いて切島は安心する。そこで爆豪は質問する
「テメェら、簡単にオールマイトを倒せると思ってんのか？」
「確信はないけど最初に説明されたんだよ!!対オールマイト用の『怪人脳無』がいるから大丈夫だって!!」
「（怪人脳無・・・）それはどんなものなの？」
「わかんねぇ！でもオールマイトに合わせた怪物だって言ってた。」
　フレンダ以外の２人はそれで情報は十分だと思った。しかし、フレンダは質問を続けた。
「その脳無がオールマイト以外の人と戦うとどうなるの？」
「そいつは死ぬだろ。だって説明していた時１人頭を潰されて死んでるんだから。」
　それを聞いた時、三人は驚く。そこでフレンダは慌てて聞く。
「首謀者と脳無は今どこにいるの!?」
「２人は多分広場にいると思うけど。」
　それを聞いてフレンダはツールの持ち手の部分でその敵の頭を思いっきり殴って気絶させる。

「おい、そいつ大丈夫ｋ
「私は先に広場に向かっとく!!」
切島が言い終わる前にフレンダは自分が出せるスピードで広場に向かう。
ーーーーーーーーーーーー
死柄木は五本指を蛙吹につけていた。しかし⊠個性⊠は発動しなかった。
「本っ当にかっこいいぜ、イレイザーヘッド。」
相澤は頭を潰されていながらも⊠個性⊠を発動していた。しかしすぐに脳無に頭を地面に叩きつけられる。それを見て緑谷は水から飛び出る。
（ヤバいヤバいヤバい!!）（さっきの敵たちとは明らかに違う!!）（蛙吹さん!!）「手っ放せぇ!!」
「脳無。」
「ＳＭＡＳＳＨ!!!!」
そう言って緑谷は殴る。そして腕が折れていないのを見て安心したが、煙が晴れたのを見て自分が殴ったものは脳無と言うことに気がつく。そしてその脳無は何もなかったかのように死柄木の盾として緑谷の攻撃を防いでいた。
「いい動きするなぁ君。スマッシュってオールマイトのフォロワーか？まぁ、いいや。」
そう言ってから脳無は緑谷の右腕を掴み、死柄木は再度蛙吹を五本指で触ろうとす

る。

　しかし・・・

「間に合ったぁぁぁぁああぁぁあぁぁあぁぁぁ!!!!!」

　そう叫びながらフレンダが死柄木に飛び蹴りを喰らわせる。そして死柄木はそのまま蛙吹に触れられず水に落ちていく。

　そしてフレンダは息を切らせながら水に落ちた死柄木に言う

「結局・・・情報を制するものは・・・戦いを制するって・・・わけよ。」

　そしてフレンダは息を整えて、髪を靡（なび）かせながら死柄木に宣言する。

「あなたたちが先生にやったこと、そして今梅雨ちゃんにしようとしたこと、まとめて１００倍返しにしてやるわ。」

　元暗部（ヴィラン）と現敵（ヴィラン）が衝突する

#13 ☒個性☒で多重能力ってありなのね。

フレンダはすぐに水の中にいた三人を陸に引き上げる。その間脳無と呼ばれた怪物は一歩も動かなかった。
『１００倍返し』・・・ねぇ。」
死柄木は陸に上がりながらつぶやく。それを聞いてフレンダは三人に小声で
「相澤を連れて逃げなさい。」
そう言ってすぐに脳無と死柄木から距離を取る。
「寝言は寝てから言えよ。」
「残念、私は寝ている間に言葉を話さないタイプの人間だから。」
そしてすぐにスカートから小型爆弾を三つ取り出し、死柄木に向かって投げる。死柄木は動く様子を見せず、
「脳無。」
と言う。そして爆弾が爆発する。煙が晴れて脳無が死柄木を守るための肉壁になっていた。しかしフレンダはそのことに驚かず

（やっぱり、あの脳無って怪物はあの死柄木に命令されるまでは動かない。つまりあいつの耳・・・いや、正確に言えば『脳』を潰せば命令が聞けなくなる。）

（それとさっきの緑谷の攻撃を受けて無傷だったのを見て薄々気づいてたけど今の爆発で確信した。脳無は『衝撃無効』もしくはそれに近い⊠個性⊠を持ってる。だったら衝撃波に絞った爆弾はダメだ。）

彼女がそう考えていると脳無がいつの間にか目の前にいて右拳を振り上げていた。フレンダはすぐに右に避け、スカートからぬいぐるみを取り出し顔面に投げ、距離を取ってからすぐに起爆する。

〝ドカーン!!!!〟

と爆発して追い討ちをかけるようにミサイルを複数取り出し全て脳無の頭めがけて発射する。煙が発生する。見えないが、コレを食らったら普通は死ぬだろうと考え、

「で、あんたのお気に入りの脳無がやられちゃったわよ?」

と煽るように言う。しかし、死柄木は笑っていた。

「馬鹿だなぁ。お前。」

そして、顔面がグチャグチャになった脳無が煙から出てきてフレンダに襲いかかってきた。

「ッ!!」

フレンダは間一髪で脳無を避けるが、完全には避けきれず、左腕に攻撃が当たり、

〝バキバキバキ〟

と音が鳴った。

「ギッッ!!」

あまりの痛みにフレンダは大声で叫びそうになるが、堪える。そして攻撃してきた脳無を見ると、自分がつけた傷が徐々に治って行くのを見た。左腕の痛みに耐えながらフレンダは叫ぶ。

「『衝撃無効』だけじゃなかったの?!」

「誰がそんなことを言った。」

その言葉にフレンダは息を呑む。

「そいつは対オールマイトに作られたサンドバックだ。お前がいくら脳無を攻撃したところで意味がないんだよ。」

それを聞いたフレンダは死柄木に喧嘩を打ったことを後悔した。